

松島町文化財調査報告書 第4集

西の浜貝塚 Nトレンチ (昭和34年)

2009年(平成21年)3月

松島町教育委員会

序 文

松島町内には、約 100ヶ所の埋蔵文化財包蔵地の存在が知られております。その中でも国史跡・西の浜貝塚は縄文時代から平安時代の人々の生活を知ることの出来る大変重要な遺跡です。

こうした埋蔵文化財を保護し、次世代の人々のために整備、活用を図ることは、私たちに取って重要な責務であると考えております。

さて、松島町ではこれまで発掘調査が行われて、未整理であった遺物や資料を当時発掘をおこなった後藤勝彦氏に平成2年より時間をかけて遺物の修復や資料の整理を依頼し調査報告書として取りまとめたものを順次発行しております。

昨年度は昭和34年・35年調査のR・Sトレンチと昭和41年に行われた発掘調査の報告書を発行しており西の浜貝塚Nトレンチの報告書は3冊目となります。

本書が広く町民や県民の皆様、また各地の研究者の方々に活用され、地域の歴史資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりますが、遺跡の保存にご理解、ご支援いただいた方々と発掘調査に携わった関係機関の皆様に対し厚く御礼申し上げます。

平成21年3月31日

松島町教育委員会

教育長 米川 稔

目 次

[I] はじめに ······	1
[II] 貝塚の位置 ······	1
[III] 調査区と堆積(第1図) ······	1
[IV] 出土遺物について ······	2
(1) 土器について ······	2
(2) 骨角製品 ······	35
(3) 石製品 ······	35
(4) 貝製品 ······	36
(5) 自然遺物 ······	41
[V] 出土遺物の考察 ······	44
(1) 土器の編年について ······	44
(2) 骨角製品について ······	47
(3) 石製品について ······	47
(4) 自然遺物について ······	47
[VI] 終わりに ······	47
[VII] 写真 ······	50

昭和34年西の浜貝塚Nトレンチ（第二地区）の調査

後 藤 勝 彦

[I] はじめに

昭和34年(1959)の西の浜貝塚の調査は、塩釜市史編纂事業から松島湾岸の古代遺跡の調査に発展した、宮戸島遺跡調査会が宮戸島の研究成果を更に推進するために、宮戸島貝塚と同時期の貝塚として、西の浜貝塚が選ばれ後晩期の土器編年を更に深めるために実施された。

昭和34年は調査3地点、第一地区（A B C D区）製塙遺構と製塙土器の検出、第二地区（N区）と第三区（R区）である。昭和35年にS区の調査が実施される。

松島町史資料編1(1989)にN区の資料、写真7頁21葉、実測図4頁、拓本図24頁、写真図35頁によって紹介してある。残念なことは編纂でも困惑したが、層位的な記載が出来ず、当時の土器編年の特徴を持つ各時期型式で、羅列的に第1類土器から第16類土器に分類記載に止まる。更に、注1として、「第6類土器として分類した一群については、後期末の複雑な要素と共に、研究者の主点のとらえ方によって意見の大きくわかるところである。この分類もこういう意味では問題を含むものである。第5類土器と共に、改めて位置づけを考えなければならない。今回は、研究報告書でなく町史資料編という性格から資料の提示を中心に考えたことを付記しておきたい。」と述べている。苦肉の方策である。N・R・S区の大量の資料提示と資料提示に要した時間に関わらず、土器編年研究はあまり前進しなかったのである。

R・S区の第4類土器が、第3類土器の影響を受けて第5類土器の前身とした「西の浜式」が新設されたが、N区の第5・6類土器の検討が出来なかった。

[II] 貝塚の位置

本貝塚は、仙石線高城町駅から東方へ0.8km、磯崎集落海岸沿いに、県道松島・鳴瀬線を東に進む。北方から延びる標高10m前後の丘陵が海岸にせまる。その突端舌状台地の東西両斜面に形成された大貝塚で、東西130m、南北200mにわたり馬蹄形を呈する。地図上では、仙石線松島海岸駅から北東へ約2.5km、東北本線松島駅から東へ2.0km磯崎字西の浜・長田地区に位置する。

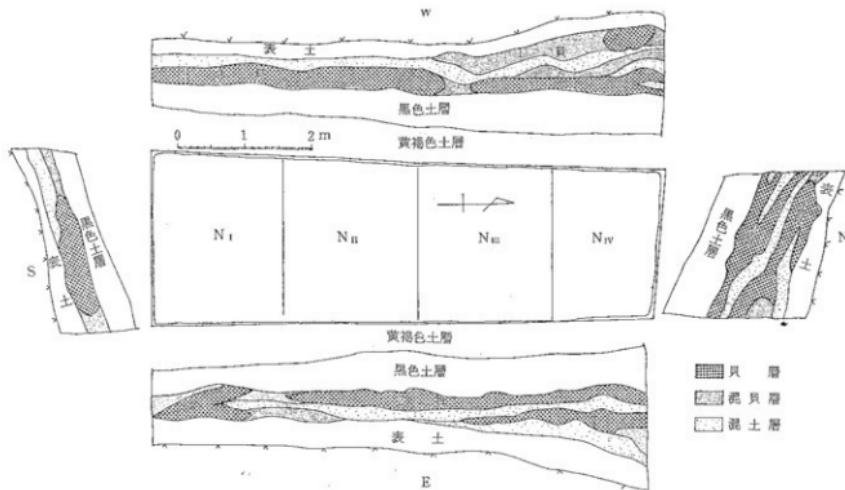
西の浜貝塚は別称磯崎貝塚とも呼ばれ、松本彦七郎によって『仙台郷土研究』(1939)「磯崎部落より館ヶ崎への小径が丘を一つ超えた所に広大な本貝塚が存し、又の丘の上から低い所にかけて発達し居る。…」と紹介されている。

[III] 調査区と堆積 (第1図)

Nトレンチは、台地東斜面のほぼ半分より南寄り、東斜面に沿った中段の細長い狭い畠地に設定した。ほぼ南北に2×8mで、南からI～IV区が設定された。

壁面図を見ると、貝層は北に厚く、約1mを越える。堆積は西壁で表土、1貝層、混土層、混貝層、混土層、2貝層、黒色層。黄褐色層と北IV区に多い。1貝層（上部貝層）は

III区で切れる部分がある。したがって、アサリ中心の2貝層（下部貝層）が確実である。東壁IV区では表土、混土層、1貝層、混土層、2貝層、黒色層、黄褐色層となる。西壁に比較して少ない。また、1貝層はII～III区で再び堆積する。貝層は西から東に傾斜している。本調査も斜面に並行する調査区のため層位の確認に苦労し、土器記名に混乱もある。下部の黒色層は、繊維を含んだ前期土器が中心である。1貝層（上部貝層）2貝層（下部貝層）をもとに、後期末から晩期中葉までの層位が把握される。



第1図 西の浜貝塚Nトレンチ断面図

(1) 土器について

遺物の大部分は土器であり、骨角製品、石器類、貝製品それに、獸骨、魚骨、鳥骨の自然遺物である。少量の晩期製塩関係の遺物も出土している。

南のI区から説明する。西壁は表土があつて混土層、2貝層、黒色土層である。南壁は表土、西側半分に混土層と混貝層と2貝層が堆積し、下部が黒色土層となる。東壁は表土下に1貝層北側に混土層があり、混土層を挟んで混土層と2貝層が堆積する層位である。土器の記名も貝上、これは2貝層上であり、貝層は2貝層を意味する。貝横という記名がある。タヌキ掘りした証拠であろう。土層、土層下となる。1貝層は西壁で堆積層がないので無視して該当する遺物はなし。

I区 2貝層 晩期大洞C式とB相当の遺物、後宮戸III a・b、宮戸II b併行の遺物、中期大木10式の土器が出土している。遺物量も少なく主体遺物がないので搅乱かも知れない。(図1-15)

2貝層 アサリ・シオフキ・オオノガイ・カリガネガイ・スガイ等の砂泥性の貝類で混土がやや多い構成である。

晩期大洞C式と同時期の製塩土器の口縁部2点、底部2点が出土している僅量。昭和41年8月の県委託調査の前、宮教大日本史研究会の調査が実施され、調査区が

N区と半分程重複して行なわれた調査でも、第1層土器に無文土器の分類があり、器壁が薄く外壁が黄褐色に変色し剥離の痕が見られる製塙土器が多いと記している（官教大日本史研究会1967）。

昭和35年のS区調査は、N区の上段の畠地に調査区を設定した南端のIV～V区で相当量の製塙土器が出土した。特にV区は製塙によって搅乱されていた（松島町教委 2008）。また、口縁部が研磨され入組文・魚眼状文の施文された大洞B式（例26）と大きく入組文施文土器の仲間に入る刺突刻目と範刻目（例26～30）（伴川祐 2003・2004）の土器群があり、宮戸III b式から後期末葉のものであろう。瘤状小突起施文する宮戸III a式と宮戸II式併行の土器群、中期大木10式併行の土器群も僅かに出土している。底部平底で文様は葉文・網代文・無文があり、葉文がや多いようである。上底風の底部も存在する（例66）。2貝層は宮戸III a・b式中心の層と考えられる。（例4～5例1～84、例6例1～11）。2貝横の記載の土器があり（例6）、製塙土器（12）、西の浜式併行（22, 23）もあり混在する。

土層

土層の遺物は2貝層の掘残が多い。後期末葉の入組文系土器群、範刻目や刺突刻目の宮戸III b式や瘤状小突起施文の宮戸III a式が多い。新しく西の浜式に併行する土器群の出土があり様子が変わる。宮戸II式の遺物が1点出土（第7図42）している。中期大木10式と前期初頭の遺物が多くなる。本来の土層の遺物である。前期初頭の遺物は胎土に纖維を含んだもので、羽状縄文（結節）・斜行縄文（R L・L R）・末端ループ文、組紐文、網代撚糸文がある。口縁部上面に刺突文が施文され、鋸歯状になるもの、口端に刻目が施されたものがある。裏面は擦痕、纖維痕跡程度である。

底部は前期のものは出土なし。台付き土器、上げ底土器があり、底部文様はよく整形された無文土器が多い。細い網代文もある。（例7～8例1～88、例9例1～6）

土層下

前期初頭の纖維土器2点の出土があり、斜行縄文の末端ループ文の土器である。（例9～7例8～8）

II区もI区と同じ状態である。東壁でI区から北に延びる1貝層相当の混貝層がグリット南半まで存在する。相変わらず1貝層の記述がなく、1貝層を無視している。

II区

2貝上

表土下の10cm位の混土層であり、遺物も各種が含まれている。中期大木10式相当（1）、張瘤文施文（2～8）宮戸III a式、刺突刻目文・範刻目の入組文系の土器群宮戸III b式から風越IV群（伴川祐 2004）類似のもの（9～14）、晚期大洞B式（15, 18～20）、製塙土器（29～30）が出土している。搅乱気味である。粗製土器として羽状・斜行縄文施文の土器（21～25）がある。底部平底で範整形した無文（26～28）である。（例10例1～30）

2貝層

2貝層は土器の出土は豊富で多少古い土器の混入があるが、後期後葉の宮戸III a・b式周辺の時期のまとまりをもっている。貝層は宮戸台團貝塚のような純貝層でなく混土状の貝層である。

宮戸II式から西の浜式にあたる土器群（例11～10）、張瘤文施文の土器群（例11～11～43、例12～44～45）である。張瘤文施文にも条線状に施文される（例11～11、13～30）ものと、縄文帶内部・結節に施文（例11～31～43、例12～44～45）がある。宮戸III a式である。残念なことは層位では区分できない。量の多いのは刺突刻目・範刻目施文土器群である。刺突刻目による入組文が重層施文されるもの（例12～47、53～55、58）、口端、頸部に施文されるもの（例11～40～43、例12～48～49、60）、特殊施文として縄文帶に2個単位の刺突（例12～61～62）のものがある。範刻目は（例12～63～75）であり、第12図63は2個の張瘤であり、かつて瘤の付き方で苦労したことがある。範刻目施文土器群は前述もしたが風越IV群として考えられている。三叉文が配された土器群

である(図12・76~87)。風越IV群を含めて後期末から晩期初頭になると考えられる。

粗製土器群として刷毛目文施文(図13・90~96)、縄文施文(羽状・斜行)があり、羽状施文の段落があるものが多い。後期的施文の技法である(図13・98、101~103、110~111)。斜行縄文も1点存在する(図13・113)。口縁部ヨコ整形の無文土器が相当の量である。

底部は竈整形の無文が多い。1点だけ葉文(第14図145)である。高台付きの底部が多くなる。特殊器形として注口土器がある(図14・150)。(図11~14)

土層 土層の遺物は少ない。縄文前期初頭の織維土器(図15・1~4)が中心であり、他は2貝層の混入である。(図15)

層位不明 これらは、中期大木10式1点(図16)、西の浜式併行1点(2)、宮戸II式併行1点(3)、多くは張瘤文、刺突刻目、竈刻目の施文土器群であり、大洞B式、C式各1点で、2貝層中心の土器であり、一部混土層か混貝層の遺物が混入したものである。(図16)

III区はI・II区と異なり東西両壁に第1貝層が存在し、西壁では表土下に混貝的な貝層となり、東壁では表土・混土層の下に第1貝層となる。しかし、相変わらず上層の貝層(第1貝層)を無視している。貝層上の記名があるが遺物が少ない。層の区分が出来ていない。大部分は貝層出土である。

III区 貝層上 III区での貝層上は、1貝層上と判断される。出土遺物は入組三叉文の施文された土器が多い。晩期の層と考えられる。竈刻目や瘤状小突起の遺物も出土しており調査技術の問題であろう。(図17)

1貝層 図に示した僅か4点だけの出土であり、詳細は不明である。I・II区はグリッド東壁の第1貝層を無視して調査しているのでIII区も同様であると考えられる。(図18)

2貝層 貝層の記名であるが、実際は2貝層であろう。出土土器II区と同じ数である。晩期大洞C(図18)、大洞B C(2)、大洞B(3~12)、宮戸風越IV群の竈刻目施文土器(13~25)、宮戸III b式併行の土器群(26~44)、入組文を中心とした土器群(図18・48~56、図19・1~11)、また、宮戸III a式併行の土器群(図19・12~45)、II区と同様な様相である。粗製土器の一群として刷毛文施文土器群(46~52)、羽状縄文施文(図20・1~15)の土器群、ヨコ施文帯が満つでなく結束痕の持たない土器群が多い。後期的施文方法と見ている。斜行縄文施文土器群(16~26)があり、16・23は施文の間隔が空いものであり、後期的要素である。口縁部周辺を研磨した無文土器(29~37)もある、その他、西の浜式(38)、宮戸II式(39~41)、中期大木10式併行の土器群(第21図1~5)も出土している。下層の土器群である。底部様態は平底で竈ナデの無文、網代文がある。やや上げ底の土器が存在する。注口土器がある。

土層 混在した遺物が出土している。土層の遺物は織維土器(図22・1~4)である。

III区の2貝層は宮戸III a式が主体であり、上層は宮戸III b式から風越IV群(宮戸IV式)であろう、1貝層は晩期の大洞B式を主体とした層とみなしうると考えられる。

IV区はIII区と同様で東西壁には東に傾斜した1貝層と2貝層が堆積している。グリッド南側で1貝層が混貝となり、東に混土層が入り複雑な堆積である。2貝層も間層が入り、

同様である。混土層薄く、貝層といつても混土が多く層位の認定に戸惑ったと考えられる。採集遺物に貝上と1貝の遺物があるが、遺物が少なくばらついた遺物が入っている。

IV区 1貝上 晩期の大洞C式相当の遺物(図23図1~2)、入組文と考えられる破片(4)、刺突刻目文を持つもの(6)、篦刻目文(5)、刺突と瘤状小突起施文のもの(7)、また、口縁外反した器形で壺形、口縁無文で下部に羽状縄文施文の粗製土器の仲間の出土は珍しい(10)。この時期は無文・縄文施文の粗製土器は鉢形が大勢である。

1貝 貝上と同じく晩期大洞C(図23図11)、紐状小突起と入組文施文の破片(12)、斜行縄文施文の粗製土器がある。しかし、III区1貝と同様に出土資料は図示した資料だけである。1貝は混貝層の状態が多く、そのために確認出来なかつたのであろう。

2貝 遺物の取り上げ記名は「貝」である。ほとんどの遺物が「貝」記名である。層位を区分することが出来ないほど、混貝、混土状態の様相であったことは、IV区の堆積層説明で理解できる。

遺物は少量の晩期大洞C式(図24図1~4)、大洞B式相当に遺物(5~9)、入組文系の土器群(11~24)、宮戸IIIb式併行から風越IV群の篦刻目施文土器群(25~45、図25図1~8)の出土があり、宮戸IIIa式併行の土器群(9~24)もある。また、後期宮戸II式の遺物と考えるヨコ平行沈線文施文した(25~37)遺物が特徴的に存在する宮戸II式に併行と考えられる。西の浜式併行の1点(45)がある。中期大木10式の土器群も量は少ないが出土(第26図1~4)している。I区~IV区の2貝は同様の様相である。

後期から晩期にかけての粗製土器の一つ無文土器、口縁部周辺はよく研磨された鉢形土器(5~16)、19は底部が丸底に近い土器である。製塩土器(17~18)の存在がある。Nトレチの上段にSトレチが設定され調査されている。また縄文施文の粗製土器があり(20~31)、斜行、羽状が存在する。

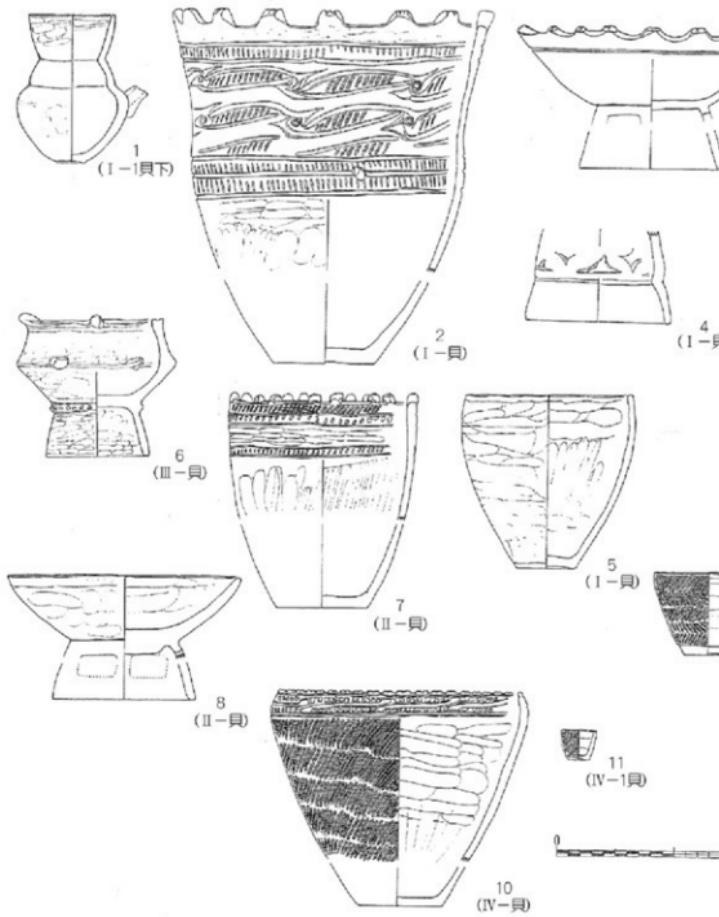
底部様態は平底(図27図1~7)があり、無文・網代文がある。特に、上げ底・高台付き(8~19)が多くなる。注口土器の存在(20~21)もある。

土層 土層は掘り残しの遺物があるが、主体は前期のループ文の織維土器(図28図4~6)である。

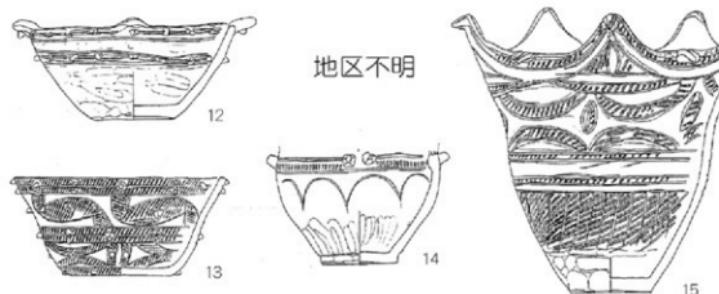
IV区は調査の混乱があったが、整理すると1貝は晩期の大洞Cを中心とした層と考えられる。2貝は風越IV群から宮戸IIIb・IIIa式を中心とした層となり、土層は前期織維土器の層と考えてよい。

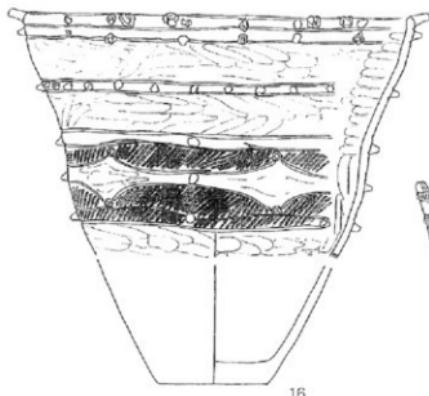
地区不明 少量の縄文前期、大木10式土器、大多数は瘤状小突起施文土器群、刺突刻目文土器群、篦刻目施文土器群、宮戸IIIa式から宮戸IIIb式、及び風越IV群の篦刻目文である。

遺物取上げ記名は「貝」である。ほとんどの遺物が「貝」記名である。層位を区分することが出来ないほど、混貝、混土状態の様相であったことは理解できる。しかも、後期末葉にあたる入組文施文土器から、大洞B式の古い時期から少量の大洞B式、B-C式、C式である。各地区的遺物出土状態の説明を補強している。(図29~33図)

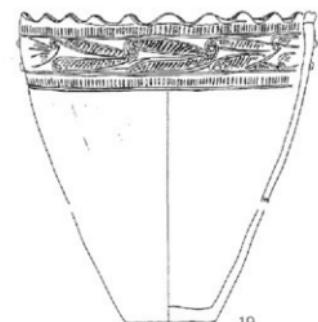


地区不明





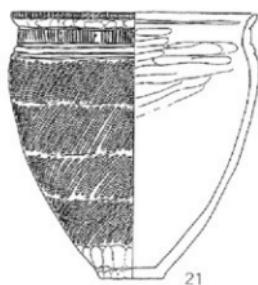
16



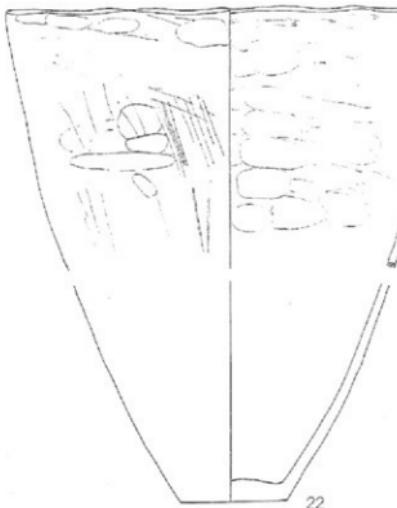
19



20

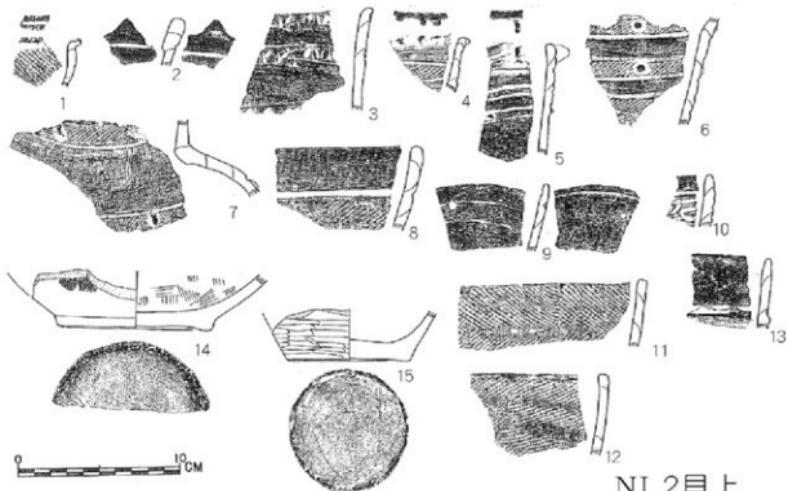


21

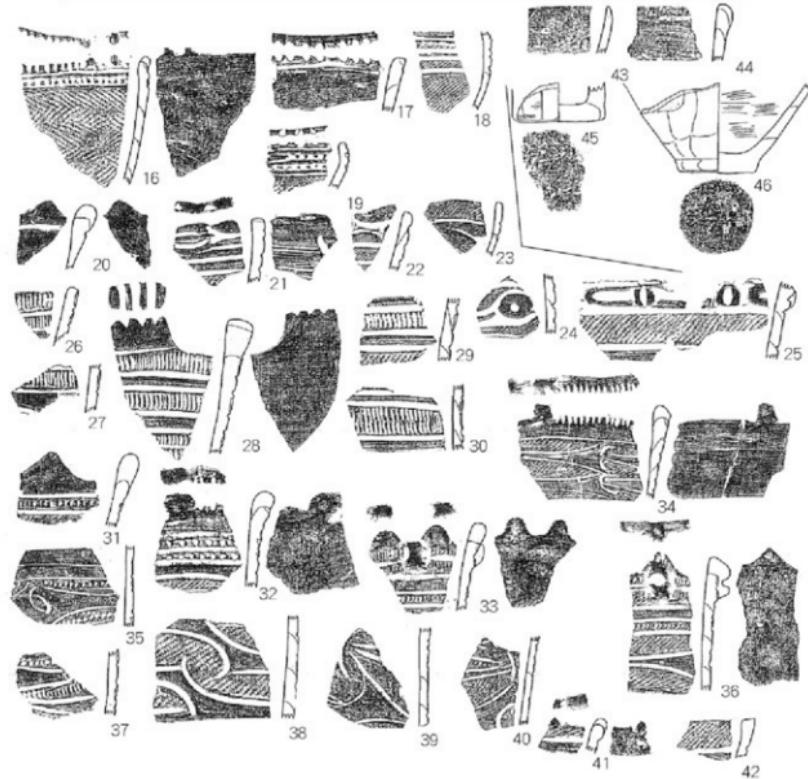


22

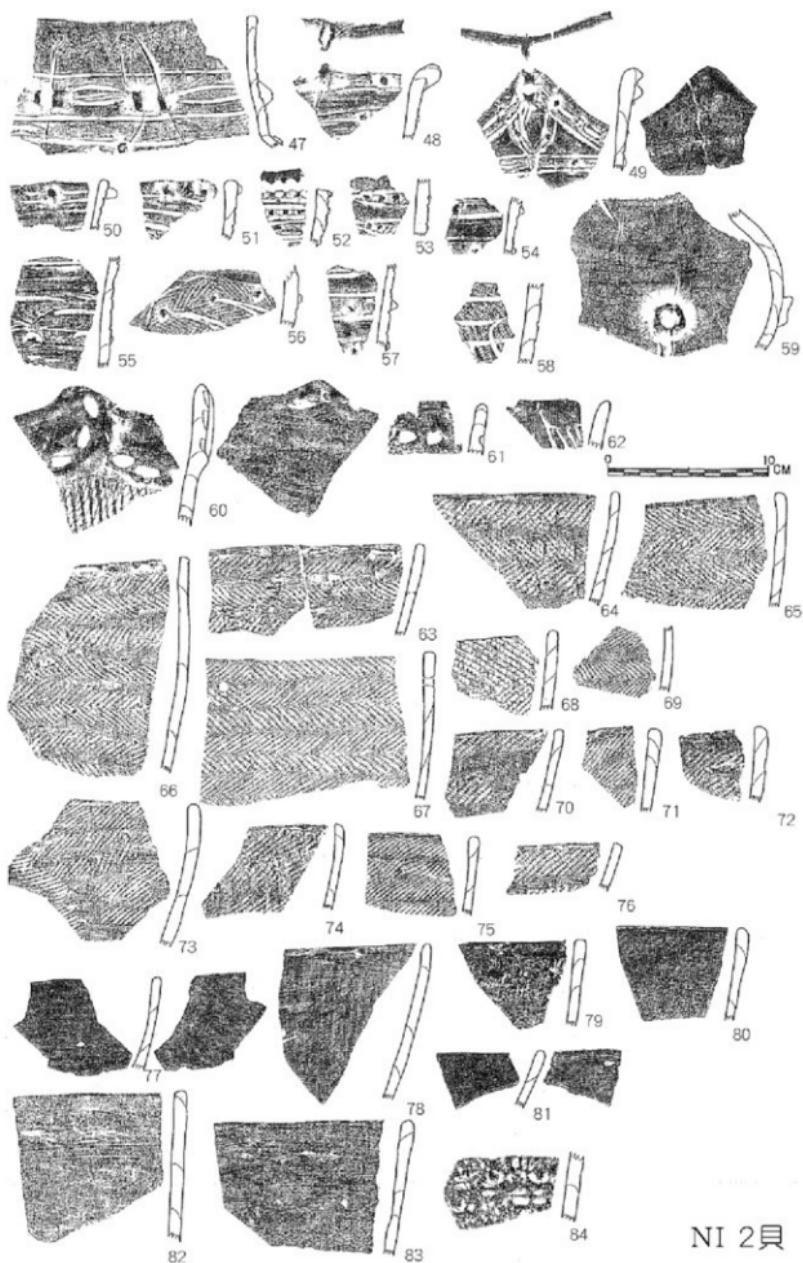
地区不明



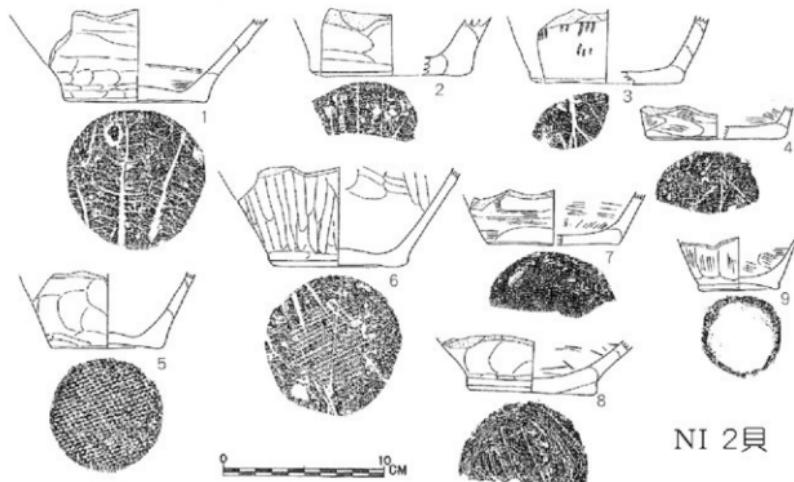
NI 2貝上



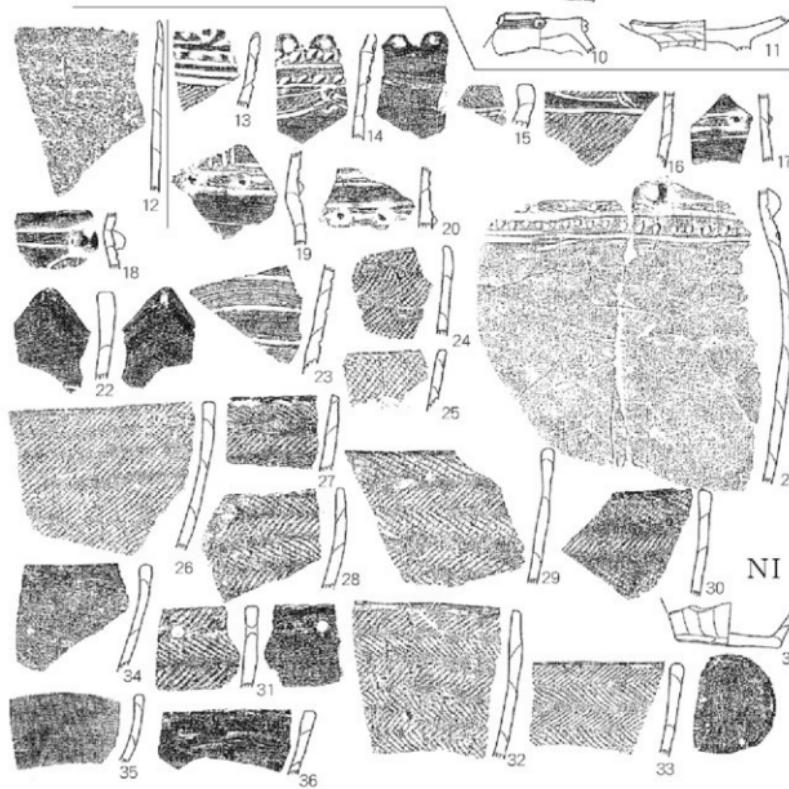
NI 2貝



NI 2貝



NI 2貝

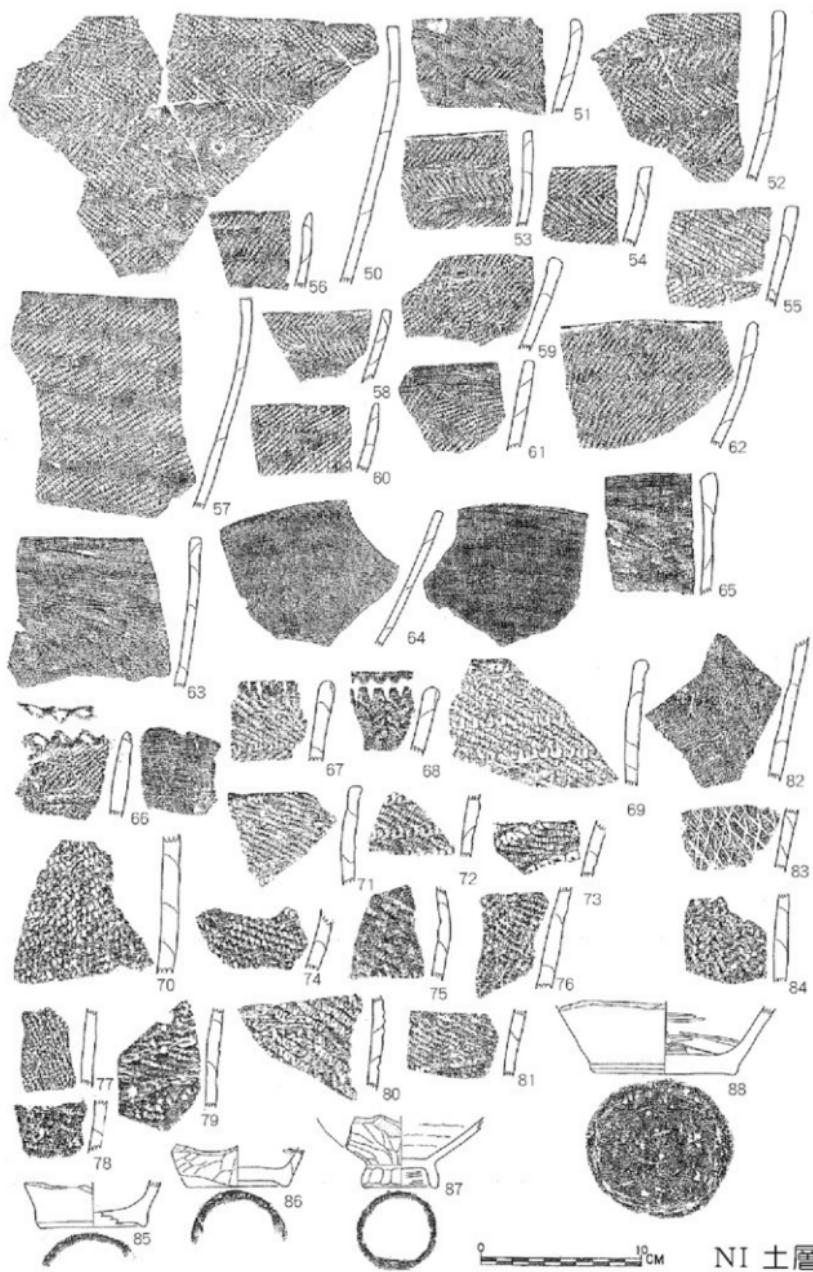


NI 2貝横

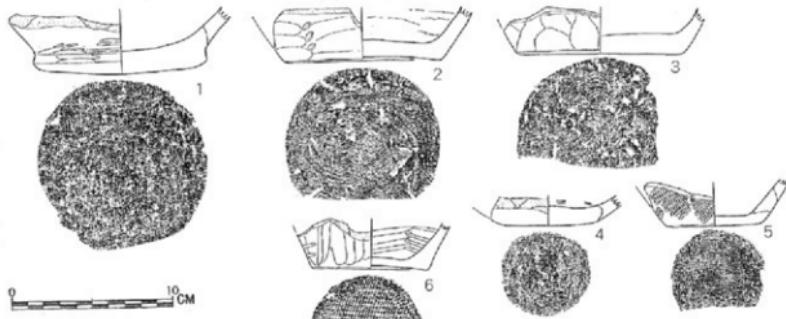


NI 土層

図7



NI 土層



NI 土層



NI 土層下



NI 層位不明

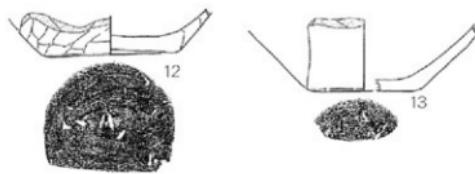
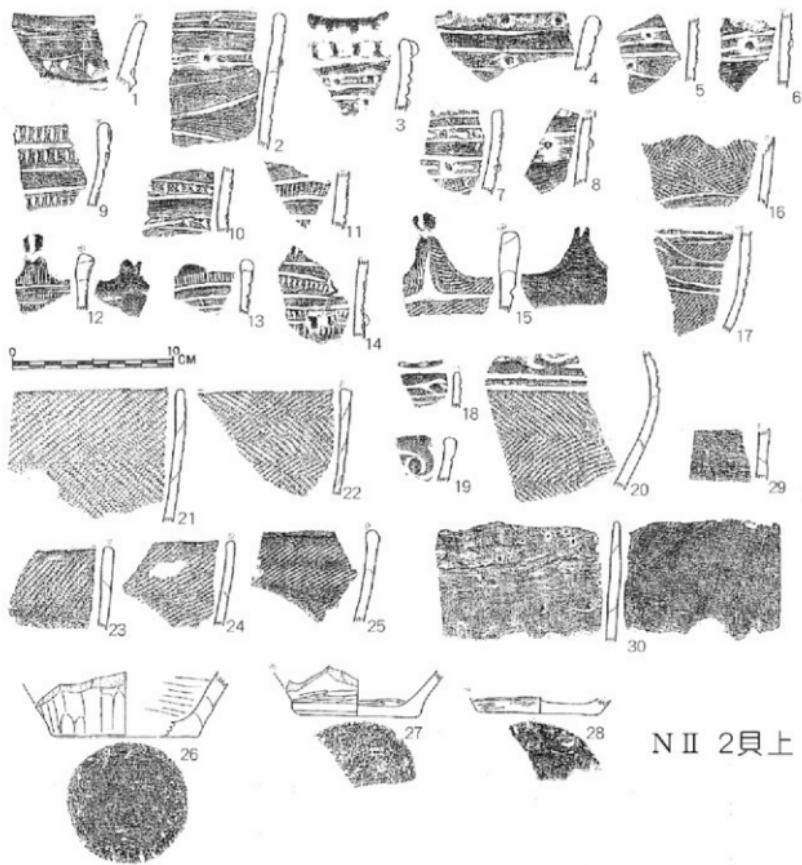


図9

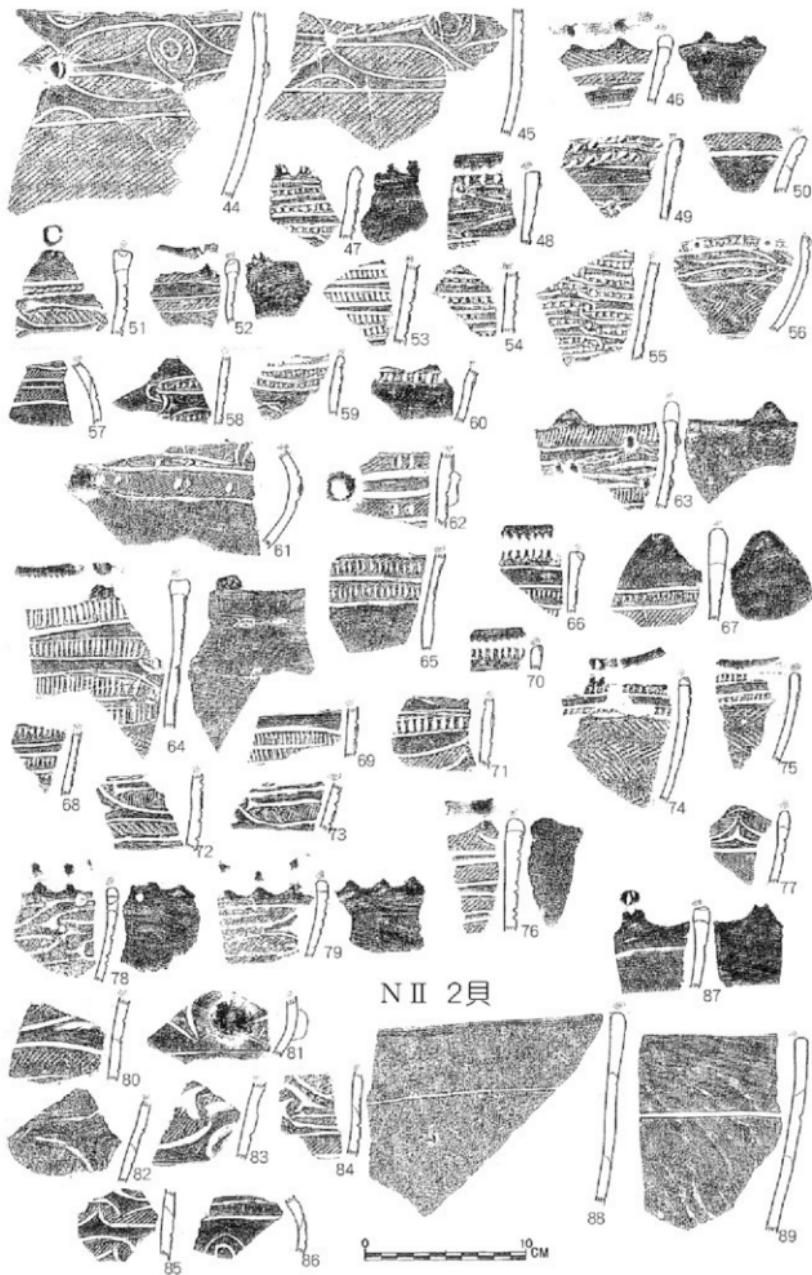


N II 2貝上

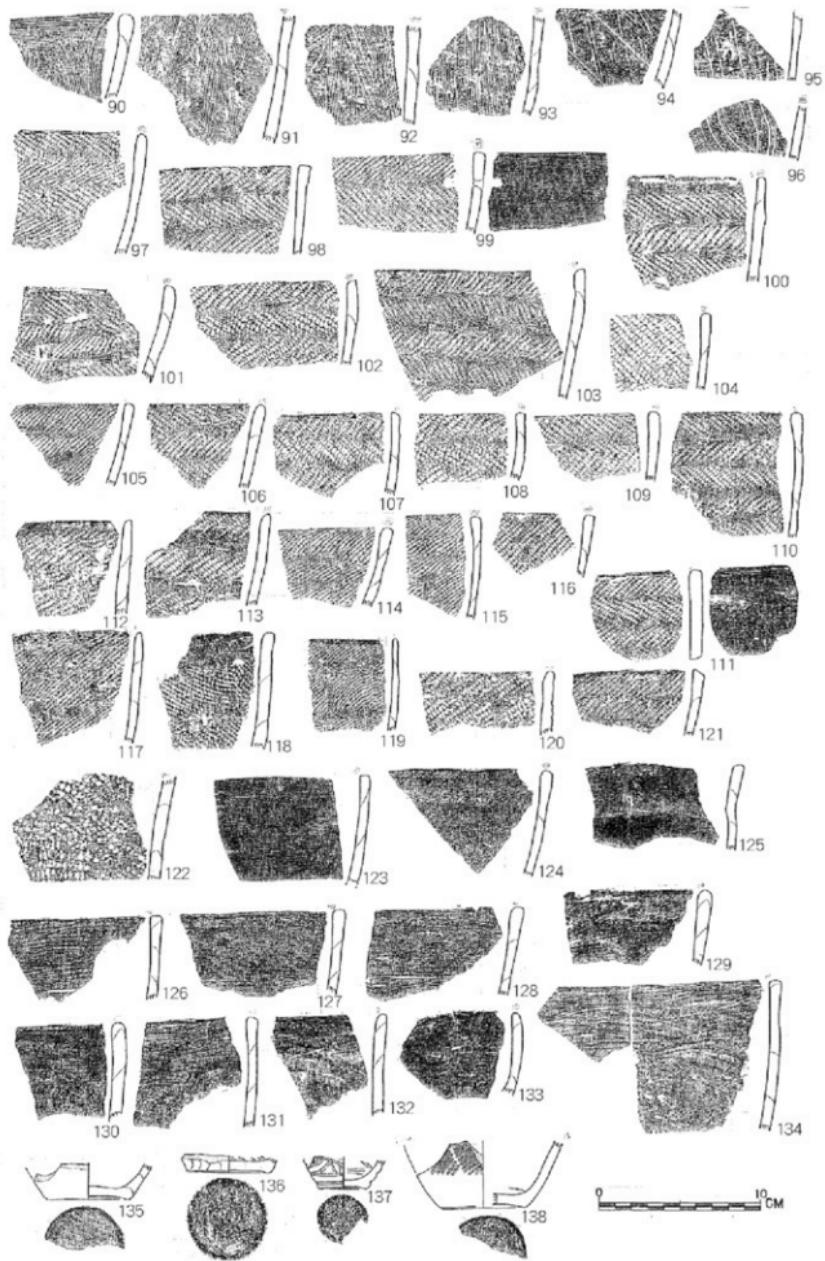


N II 2貝

図 11



N II 2貝



N II 2頁

図 13

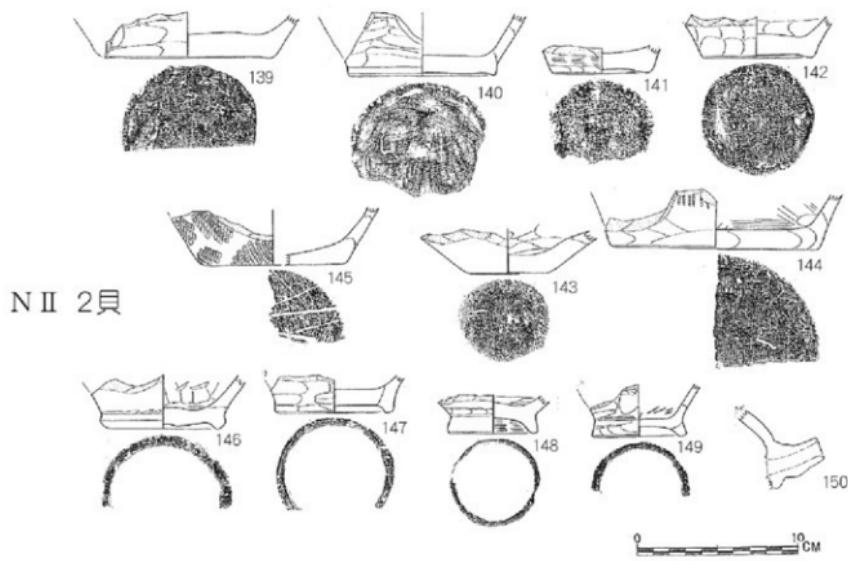
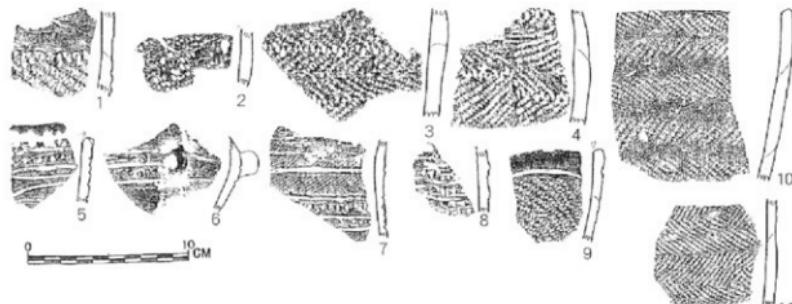


図14



N II 土層

図15

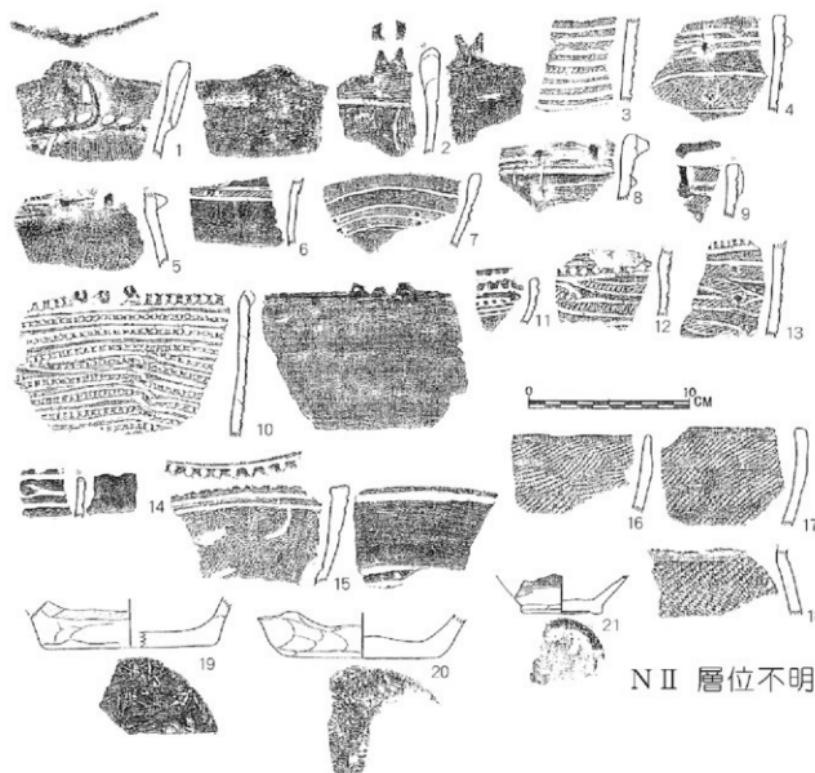


図16

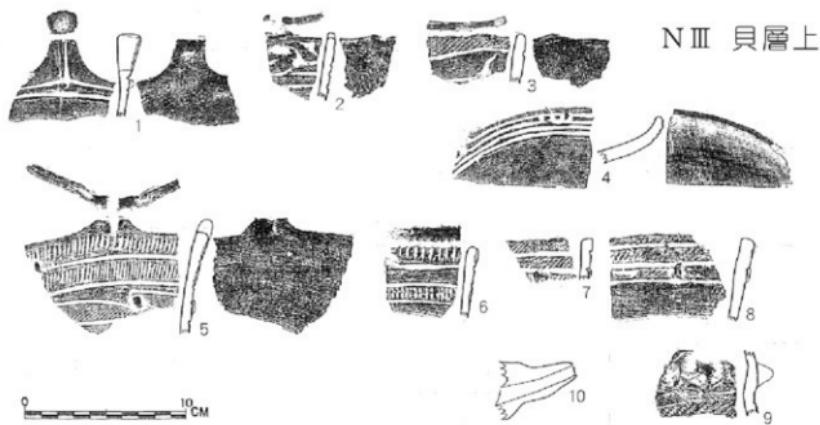


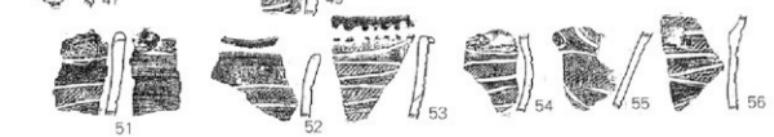
図17

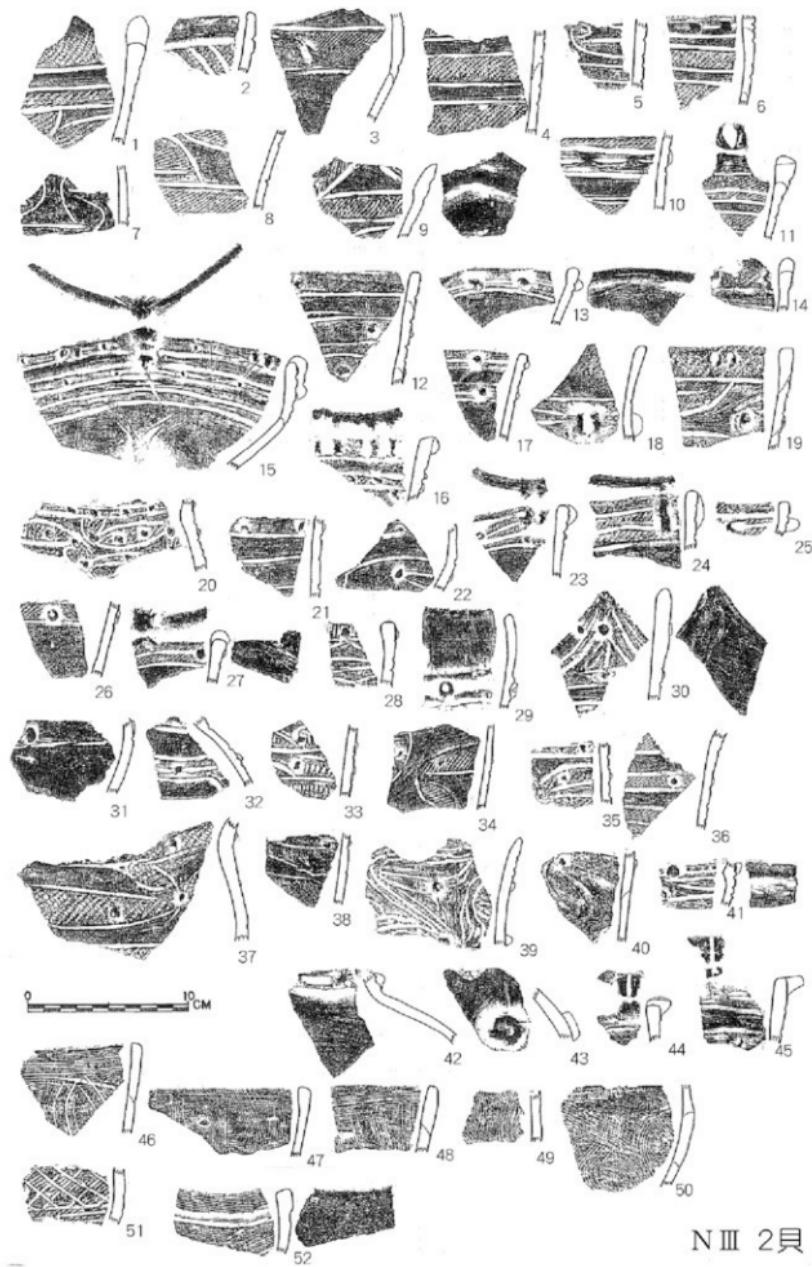


N III 1貝

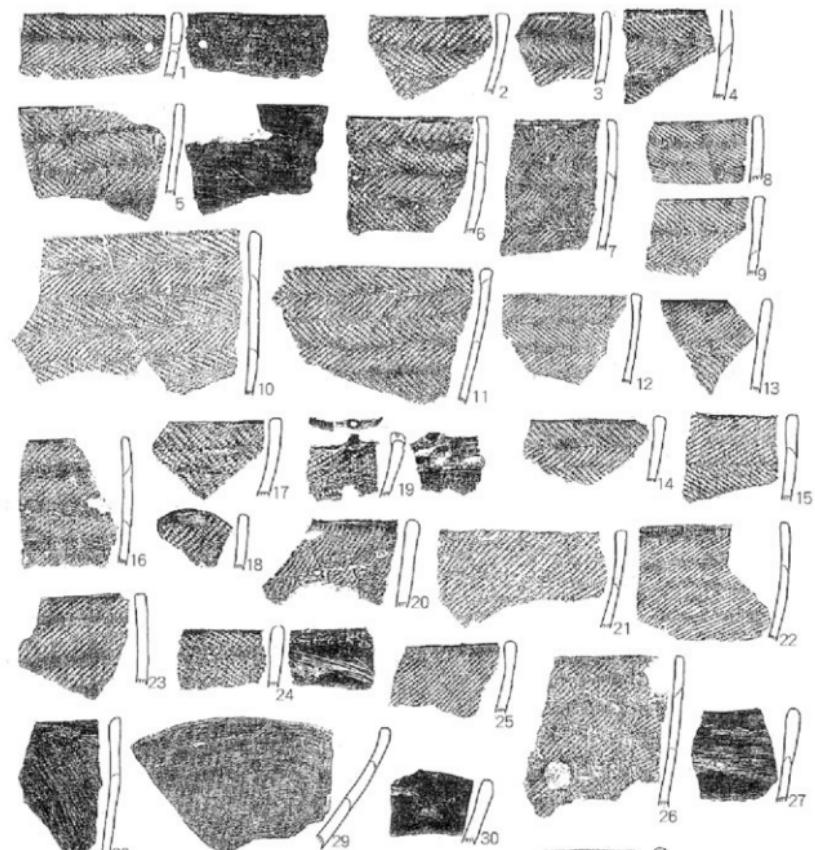


N III 2貝

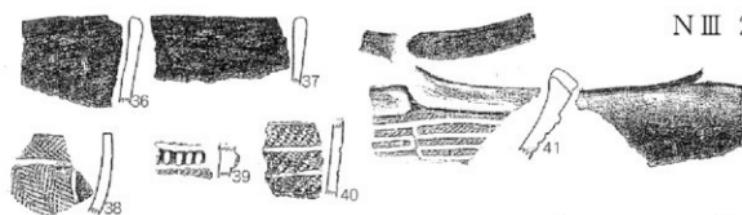




N III 2貝

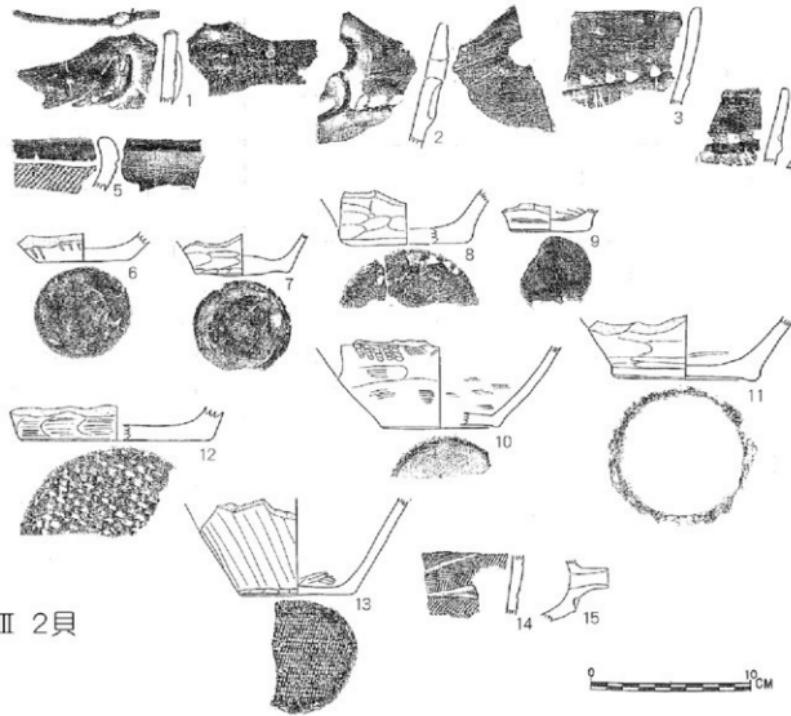


N III 2貝



0 10 CM

図20



N III 2貝

図21

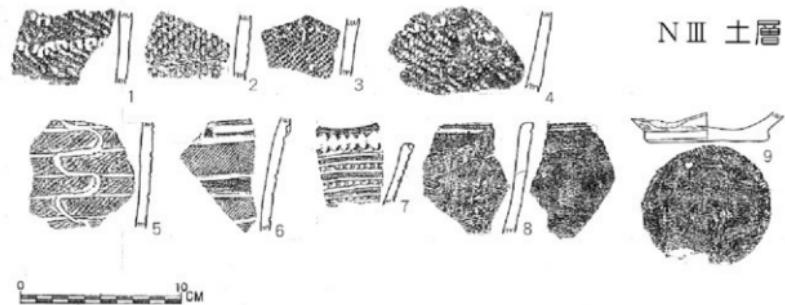


図22

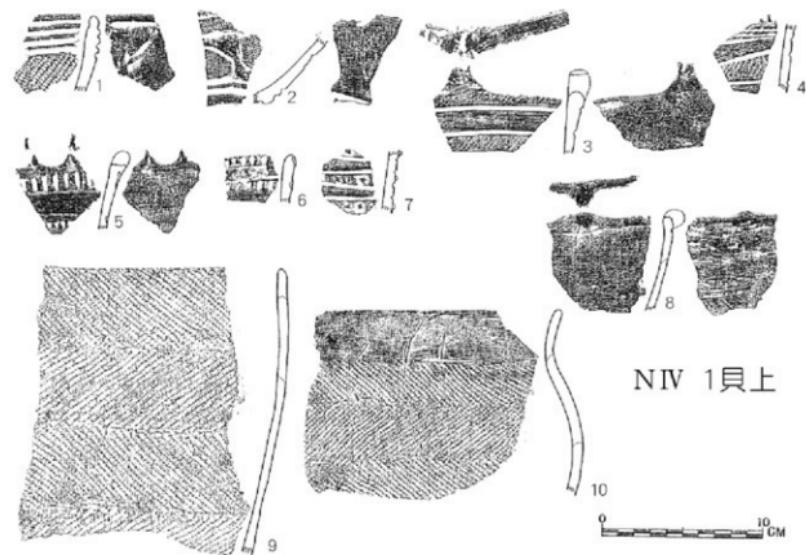
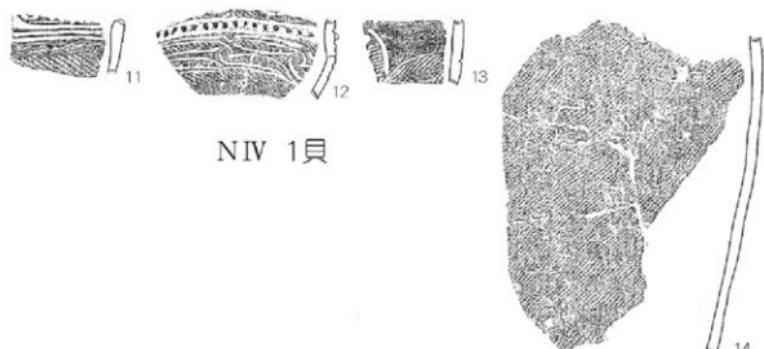
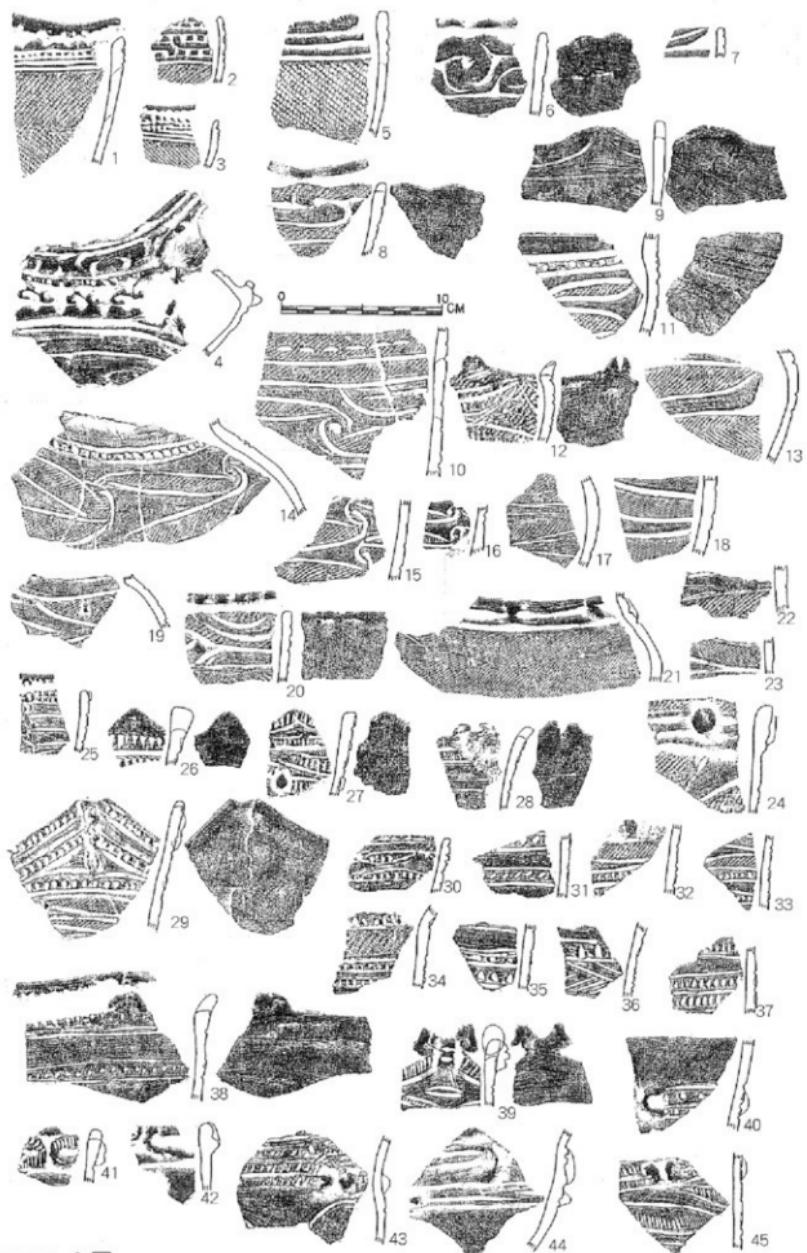


図23





NIV 2貝



NIV 2貝

0 10 CM

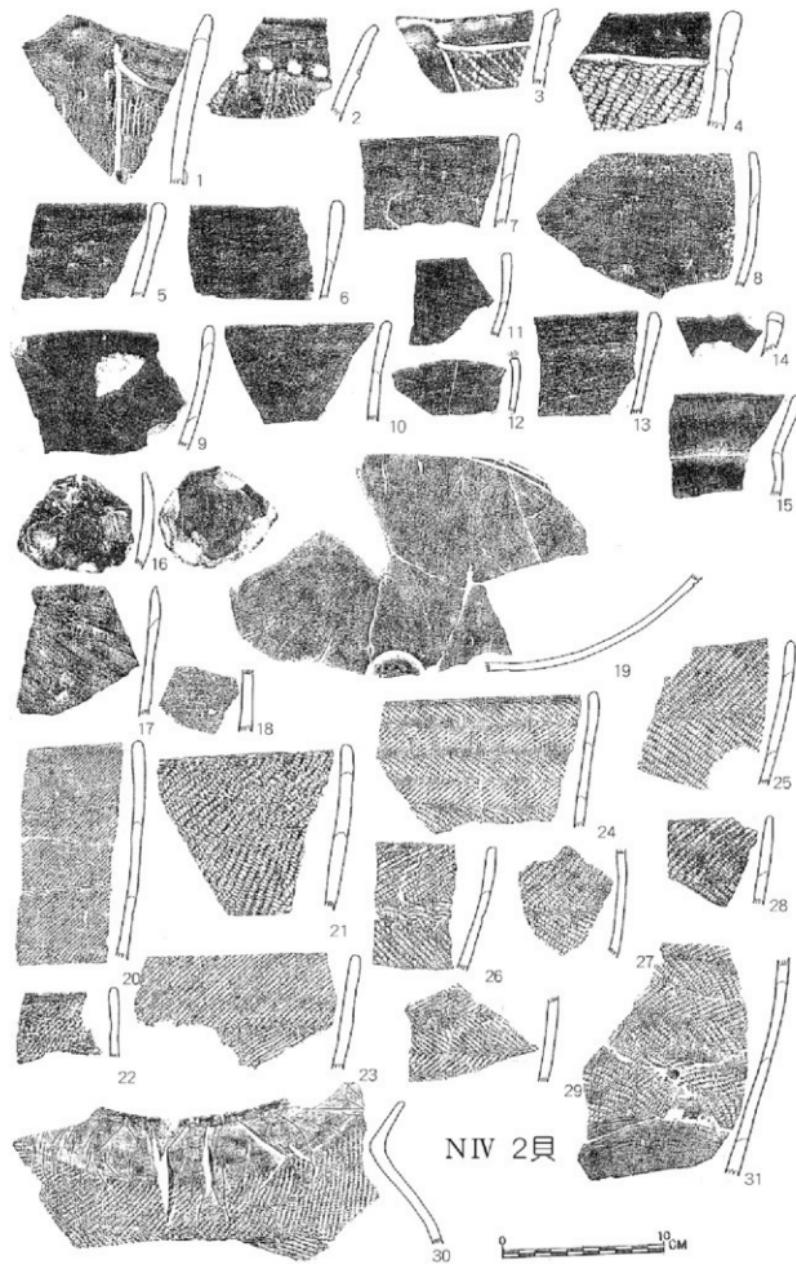


図26

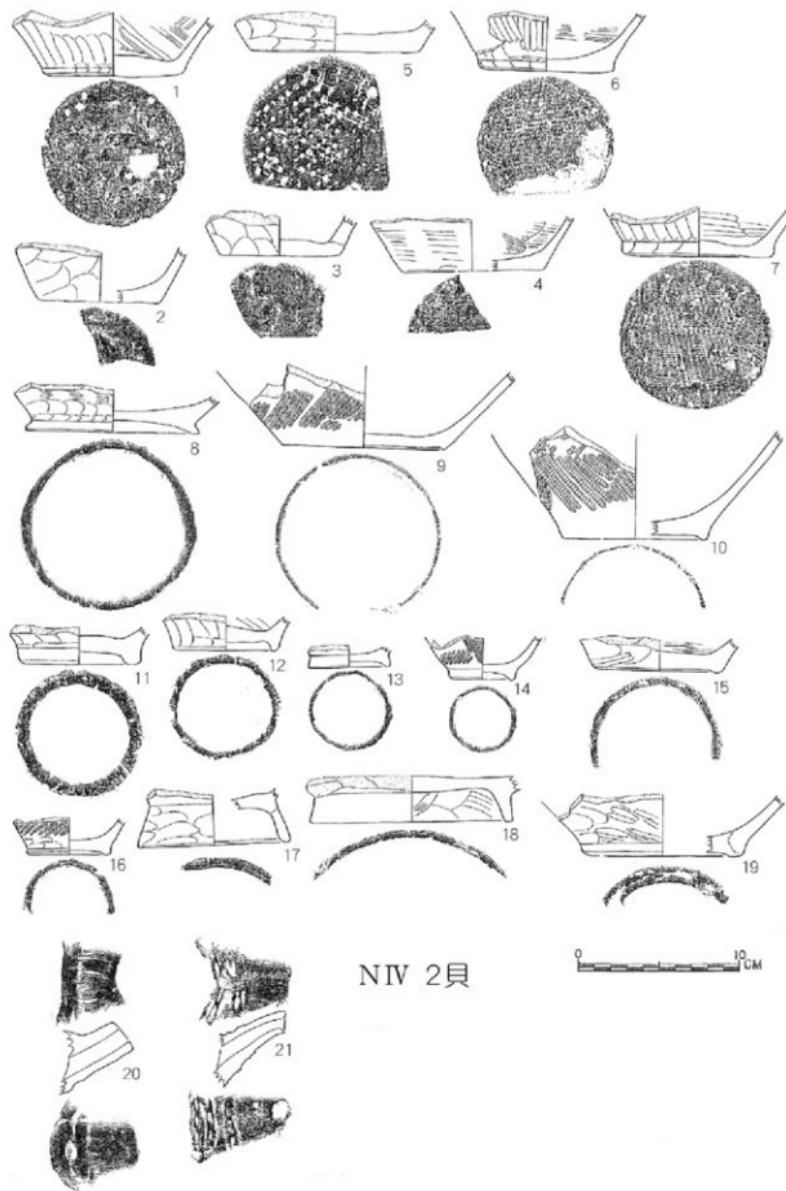


図27



N IV 土層

図28



地区不明

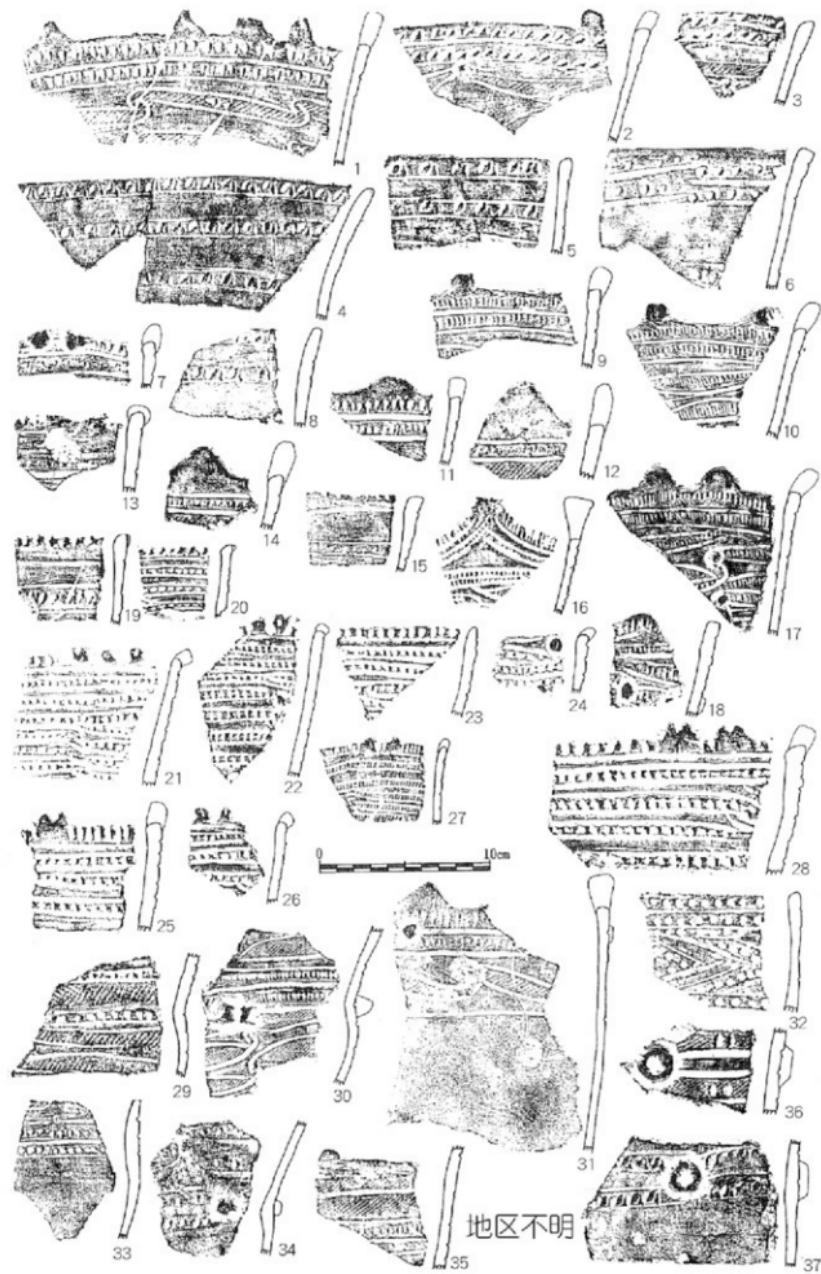


図30



図31

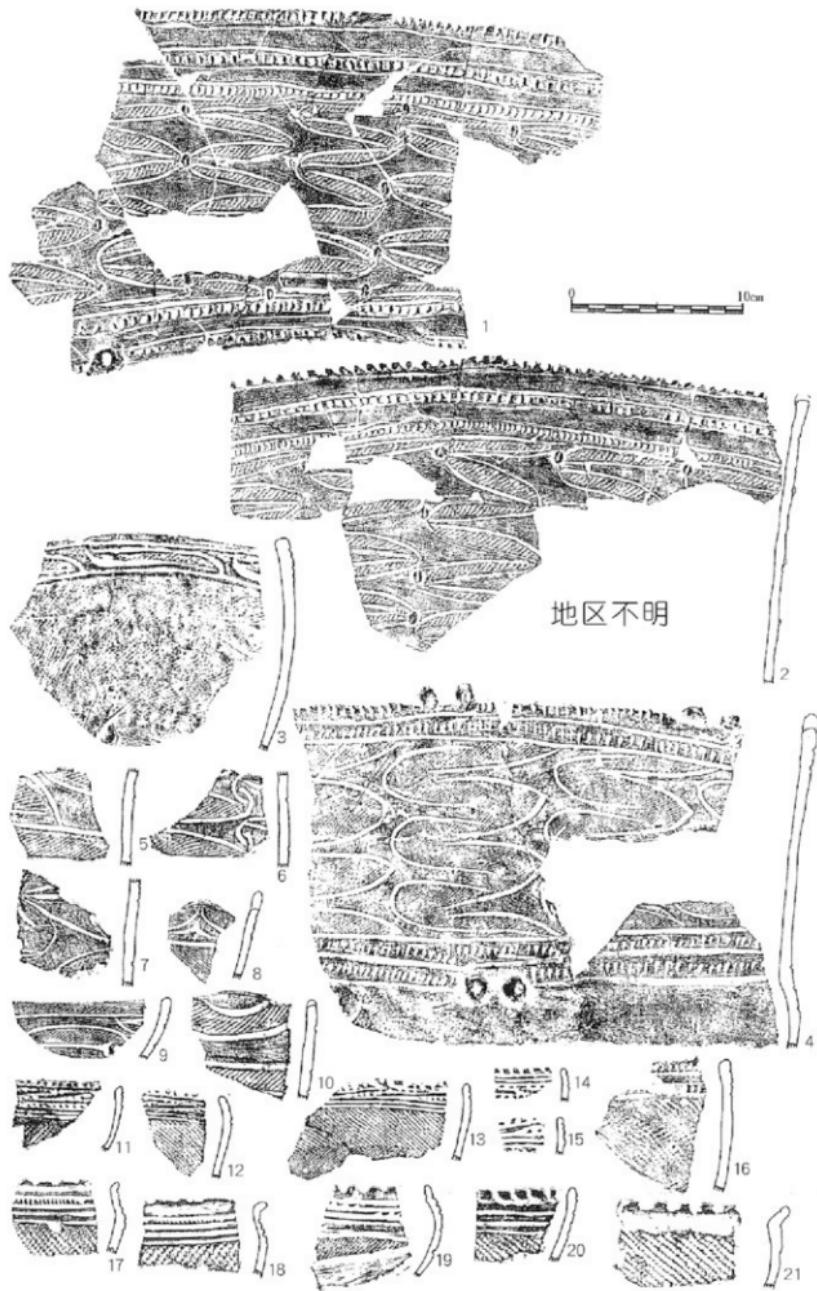
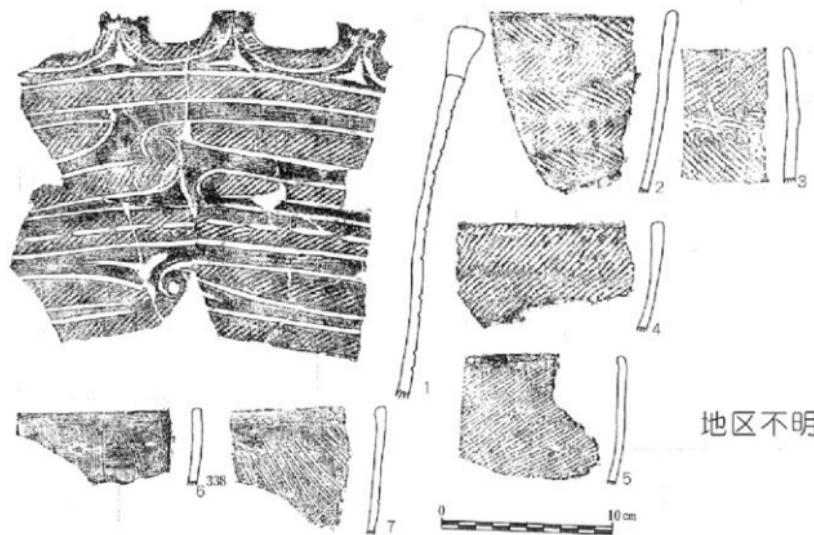


図32



地区不明

図33

(2) 骨角製品 (第34図)

① 刺突具 (骨鏃) (第34図1~6、9~11)

1~6は通称骨鏃と呼ばれているもので、4は長さ5.4cm、幅0.75~0.3cm、厚さ0.6~0.35cmであり、出土品中最大である。2は軸部にアスファルトの付着したもので、軸部を弓矢の矢柄に押し込んで固定したものである。

9~11はアカエイの尾刺を利用した刺突具である。10は長さ7.8cm、幅0.6~0.2cm、厚さ0.36~0.23cmである。アカエイの尾刺に毒があり、これを利用したものと言われている。縄文人の知恵と工夫に感心させられる。

② 釣針 (12~13)

破損品であるが、12は全体は不明だが現長4.5cmであるが、形態分類では第4類(骨針形)か第5類(骨針形と骨鰐形)の形態と考えられる。13は破片であり軸部であるが、形態不明である。僅か2点の出土である。

③ 骨匕 (14)

長さ11.8cm、幅3.1~2.4cm、厚さ1.05~0.7cmである。中手骨か中足骨を半切を使用したものである。

④ 不明骨製品 (7~8)

7は長さ10.1cm、幅1.0cm、厚さ0.9~0.7cmである。上部欠損し下部が細くなり、骨針と考えられる。8は長さ6.4cm、幅1.0cm、厚さ0.7cmである。上部欠損しているが、丸身を帯びた丹念な整形から棒状の刺突具とも考えられる。

図34下段の骨角製品は垂飾品であると考えられる。朱彩された遺物で、単なる飾り物ではなく、魔除け的なる物と考えられ、西の浜貝塚で発見された角偶と同じく呪物であろう。(阿部博志氏原図)

(3) 石製品 (第35~36図)

① 石斧 (第35図1)

刃部に欠損があるが、現長さ11.7cm、幅4.85cm、厚さ2.8~1.9cmである。所謂、三味線胴形の製品である。

② 四石 (第35図2、第36図12)

2は長さ10.4cm、幅6.8cm、厚さ4.9cmで、両面に0.2~0.3cmの2個の凹部を持つものである。12はやや小形であり、下部右側が欠損したものである。素材の石が亀裂などあり荒れている。1面に0.2~0.3cmのやや大きな凹部を持つものである。よく堅果類を割る道具であると言われているが、果たしてどうであろうか、別な用途があるとも考えられる。

③ 丸石 (第35図3~6、第36図9~11)

3は扁平な小判状丸石である。長さ11.5cm、幅7.0cm、厚さ2.3~1.6cmである。西の浜貝塚昭和41年調査の1号埋葬人骨の頭部南側に、扁平な丸石の検出があり鎮石であると聞いたことがある。似た形態であるが、下部に打痕跡があり利器の効用があった。9は3と同じような形態で、長さ10.6cm、幅7.7cm、厚さ2.5~2.3cmである。

10はずんぐりした形態で丸石と呼ぶにふさわしいものである。長さ8.7cm、幅8.2cm、厚さ4.8cmである。11は棒状で上部、下部に磨痕、打痕があり、利器として、使用されたものと考えられる。長さ8.3cm、幅4.0cm、厚さ3.5~1.8cmである。

6は丸石の仲間から外れるが、扁平で周囲を整形して形を整形した遺物である。用途は不明、3・9に近いものと思考される。長さ11.1cm、幅8.4cm、厚さ2.8cmである。

④ 擦痕疊 (第35図7)

扁平不整形の凝灰岩疊に、無作為に擦痕跡のあるものである。用途不明である。現長6.5cm、現幅7.2cm、厚さ1.0cmである。昭和38・49年の桂島貝塚の出土遺物の凝灰岩疊に無作為な擦痕跡の遺物がある。素材が柔らであるので自然のものかと考えられるが、どうも工具が存在するようである。意図が不明である。

⑤ 不定疊 (第35図4・5、第36図8・13)

4・8は不定で、整形されしかも扁平な形態である。4は現長8.9cm、幅6.6cm、厚さ1.7cmで、表面にナナメの擦痕がある。上部、下部左側に打痕による整形がされている。8は現長6.9cm、幅5.65cm、厚さ2.0cmである。扁平な点では4と同じ性格が考えられる。5は断面から石棒の破片ではないかと考えられる。現長9.9cm、幅3.5cm、現厚さ1.2cmである。

13は珪化木と考えられる。扁平な形態で先端部に研磨痕が存在する。現長12.1cm、幅7.5cm、厚さ2.6cmである。

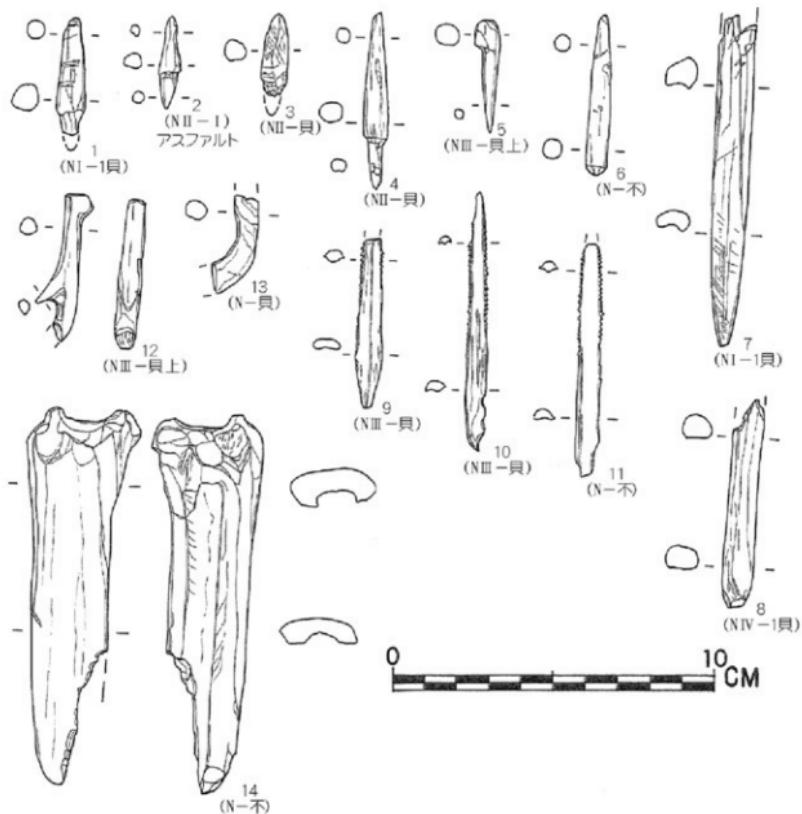
(4) 貝製品 (第37図1~12)

① 貝輪 (腕飾り)

1~6、8はサルボウ製であり、殻の上部を割って上面を擦り整形したものである。7は未製品である。7はベンケイカイ製である。1、ヨコ7.3cm、タテ4.2cm、高さ1.2cm(NI-II)。2、ヨコ7.7cm、タテ2.6cm、高さ0.7cm(NI-II)。3、ヨコ5.6cm、タテ1.9cm、高さ0.9cm(NI-II)。4、ヨコ7.3cm、タテ4.9cm、高さ1.2cm(NI-II)。5、ヨコ6.3cm、タテ6.75cm、高さ2.3cm(NI-II)。6、ヨコ8.3cm、タテ6.3cm、高さ2.5cm(NI-II)。7、ヨコ7.2cm、タテ4.3cm、高さ1.1cm(NI-II)。8、ヨコ8.5cm、タテ6.7cm、高さ2.0cm(ヨコ5.2cm、タテ4.8cm)(NI-II)である。

② 垂飾具 (9~12)

サルボウ(10~12)・シオフキ(9)・オオノガイ(12)を利用し、殻頂部や殻の真ん中に小孔を穿ったもので、垂飾具と考えたものである。



トレンチ不明

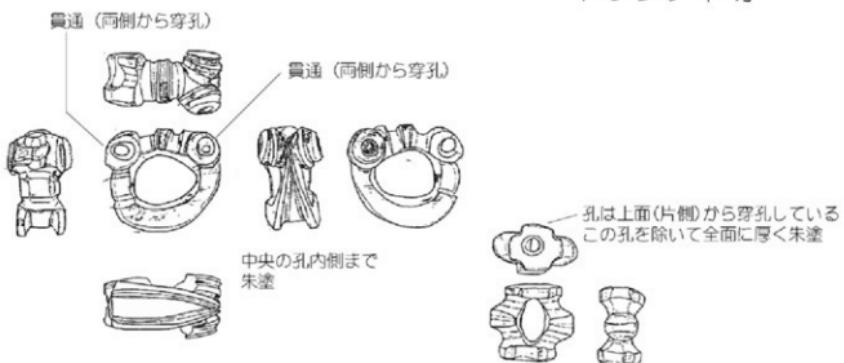


図34

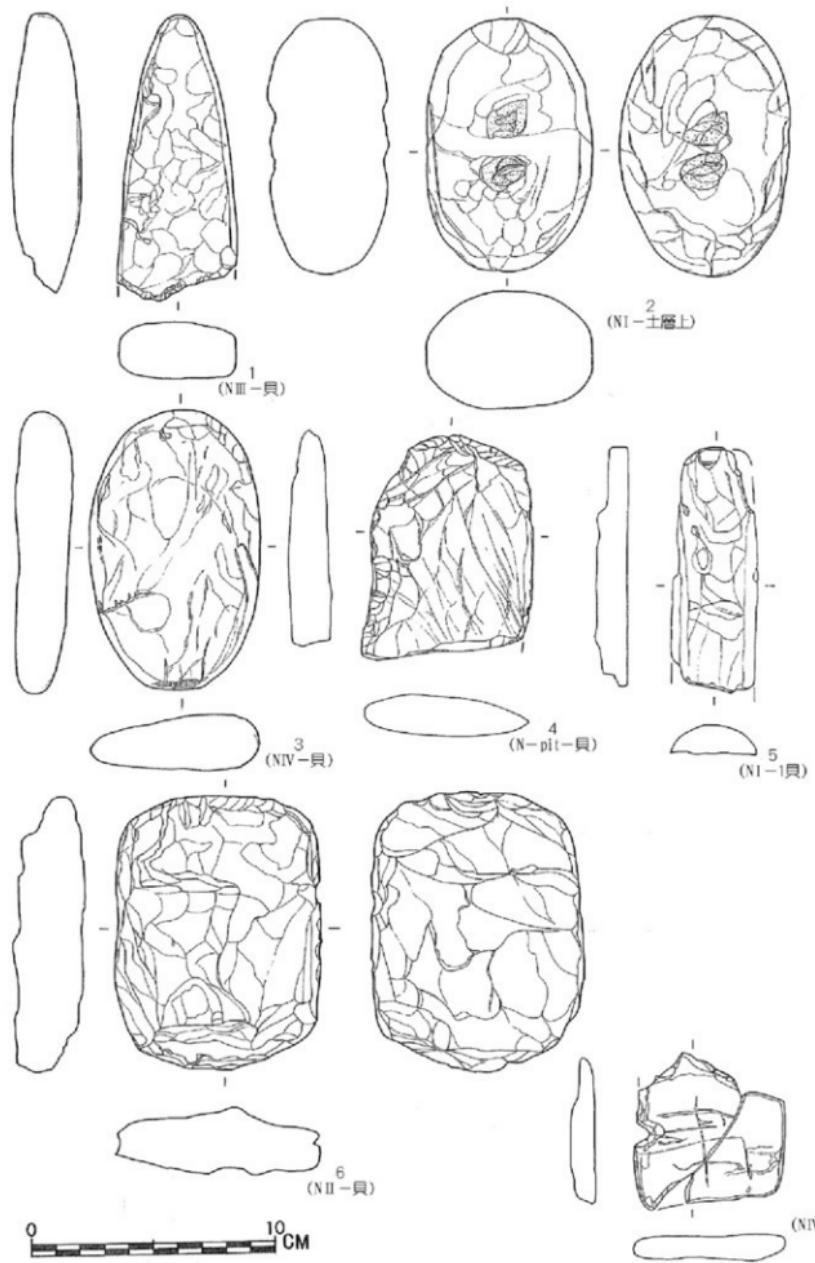


図35

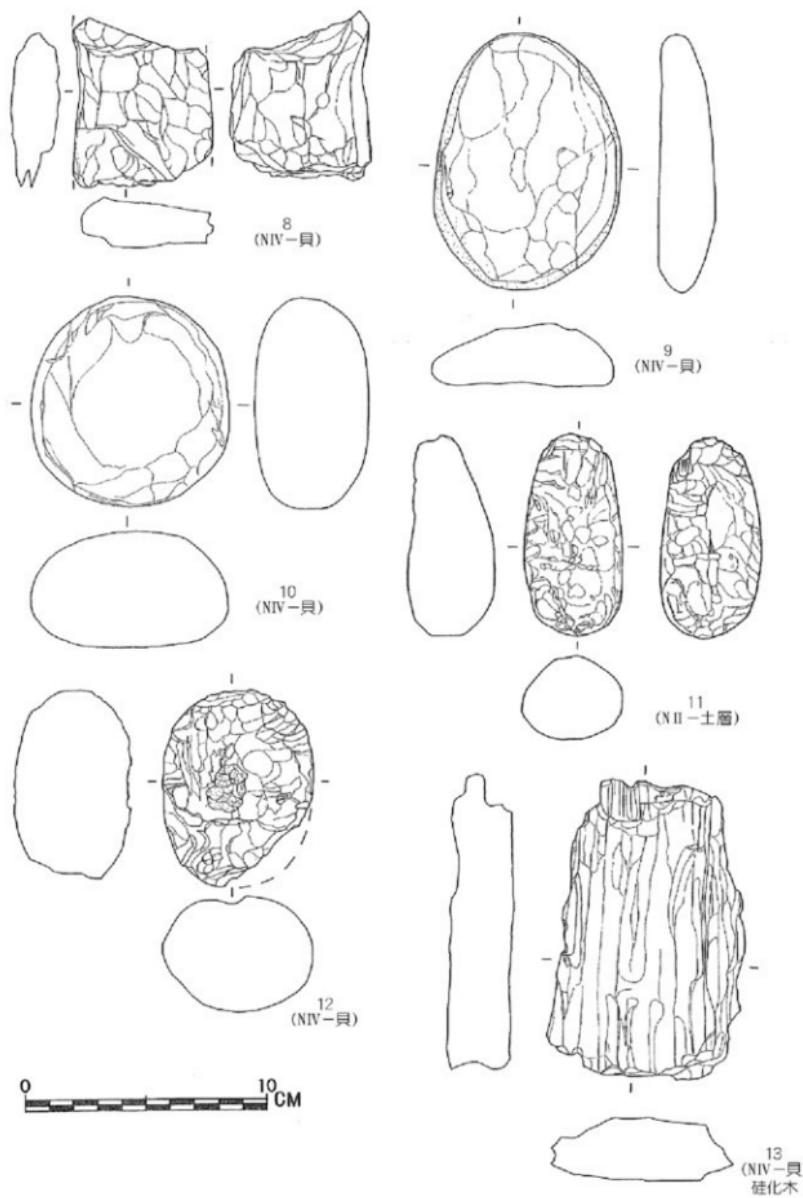


図36

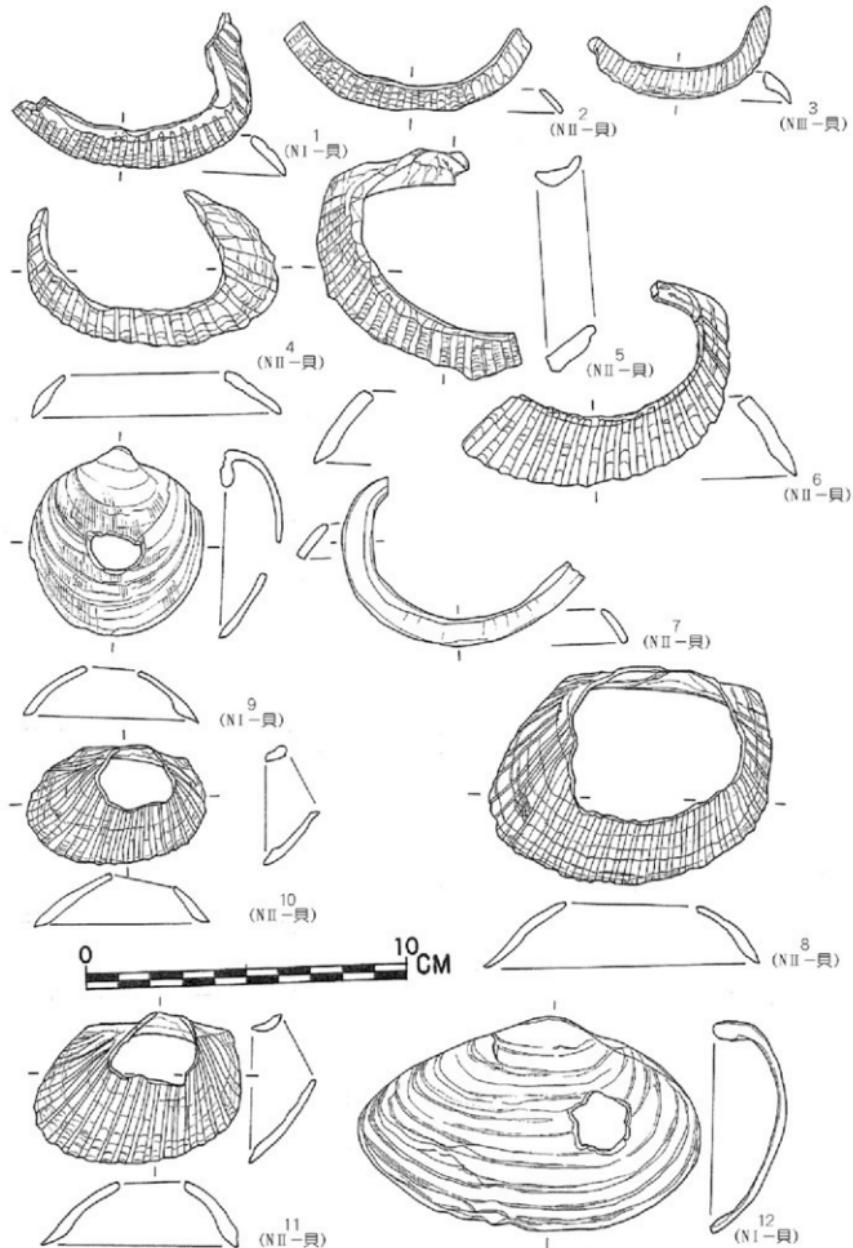


図37

(5) 自然遺物

① 種類

哺乳類	鳥類	
1 ウサギ	1 ハジロアビ	11 ホタテガイ
2 キツネ	2 ウミウ	12 アズマニシキ
3 イヌ	3 ヒメウ	13 カキ
4 カワウソ	4 ヒシクイ	14 オキシジミ
5 オットセイ	5 マガン	15 ウミニナ
6 ニホンシカ	6 カモ類 (6種)	16 レイシ
7 イノシシ		17 クボガイ
8 ホモ(ヒト) (8種)	貝類	18 アカニシ
	1 アサリ	19 ツメタガイ
魚類	2 マテガイ	20 スガイ (20種)
1 スズキ	3 イガイ	
2 クロダイ	4 オオノガイ	爬虫類
3 マダイ	5 ハマグリ	1 ウミガメの一種 (1種)
4 マグロ	6 チョウセン	
5 カツオ	ハマグリ	
6 ブリ	7 サルボウ	
7 アカエイ	8 カリガネエガイ	(全体で45種)
8 ヒガングフ	9 アワビ	
9 コウイカ	10 シオフキ	
10 アカエイ (10種)		

② 哺乳類

ニホンシカ

下顎骨 R 1点、L 4点、上顎骨 R 3点、L 3点である。第一頸椎 2点、第二頸椎 2点、肩甲骨 R 11点、L 5点、上腕骨上端 R 7点、L 6点、上腕骨下端 R 4点、L 4点、中手骨 R 8点、L 2点、寛骨 R 1点、L 2点、大腿骨上端 R 1点、L 1点、大腿骨下端 R 9点、橈骨上端 R 7点、L 5点、尺骨 R 3点、L 5点、脛骨上端 R 3点、L 11点、脛骨下端 R 13点、L 6点、距骨 R 4点、L 3点、踵骨 R 5点、L 6点、カットマークの付いた資料10点、後頭部・下顎骨に多い。

イノシシ

下顎骨 R 4点、L 6点、上顎骨 R 5点、L 7点、上腕骨 R 4、L 3点、肩甲骨 R 7点、L 1点、尺骨 R 3点、L 2点、橈骨 R 1点、L 1点、寛骨 R 2点、L 1点、距骨 R 2点、踵骨 R 5点、L 2点、カットマークの付いた下顎骨あり。

ウサギ 下顎骨 R 1点(N=1)、L 1点(N=1)。

イノシシ上顎骨	R	P4	P3	P2	P1	C	I	I	I	L	I	C	P1	P2	P3			
層位	M3	M2	M1	m	m	m	c	i	i	層位	i	c	m	m	M1	M2	M3	段階
NN-貝	○	○	○	○	(○)	(○)	○	(○)	○	NN-3	NI-土	○	○	○	○	○	○	NN-3
NNI-貝	未	○	○	○	○	(○)				II-3	NN-不	○	○	○	○	○	○	NN-4
NNV-1貝	未	○	m	m	m	○				II-3	NI-貝	○	○	○	○	○	○	NN-4
NNV-1貝	未	○	m	m	m	○	○	○	○	II-3	NN-貝	(○)	○	未				NN-1
										NN-貝			(○)	○	○	○	?	
										NN-不			(○)	m	(○)			II-3

イノシシ上顎骨	R	m	m	m	c	i	i	L	i	i	i	c	m	m	m				
層位	M'	M'	M'	P'	P'	P'	C	I	I	I	I	I	C	P'	P'	M'	M'	M'	層位
NN-貝上	○	○	○	(○)						NN-3	NN-不		(○)	○	○	○	○	NN-3	
NN-貝	○	○	○	○	(○)					NN-3	NN-不		(○)	○	○	○	○	NN-1	
NNI-貝	(○)	○	○	○	○	(○)				NN-3	NN-貝		○	○	○	○	○	NN-1	
NNV-貝	○	○	○	○	(○)					NN-3	NI-貝		○	○	○	○	未	NN-2	
NNV-貝	○	○	○	○	(○)					NN-3	NN-貝		○	○	○	○	未	NN-2	
NNV-貝					(○)	(○)	(○)	(○)	(○)	NN-3	NN-不		(○)	(○)	(○)	(○)	(○)	NN-3	
										NN-不			(○)	(○)	(○)	(○)	(○)	NN-1	
										NN-不			m	○				II-2	

シカ下顎骨	R	m	m	m	c	i	i	L	i	i	i	c	m	m	m							
層位	M3	M2	M1	P3	P2	P1	C	I	I	段階	層位	I	I	I	C	P1	P2	P3	M1	M2	M3	段階
NN-貝	○	○	○	○	○	○				NN-4	NN-貝		(○)	○	○	○	○	○	○	NN-4		
NNI-貝	○	○	○	○	○	○				NN-3	NN-貝		○	○	○	○	○	○	○	NN-4		
NI-土	○	○	○	○	○	○				NN-3	NI-土		(○)	m	m	○	○	未	NN-1			
NNF-貝	○	○	○	○	○	○				NN-2	NN-貝		(○)	○	○	○	○	○	NN-2			
NNI-土	未	○	m	m	m					NN-3	NN-貝								NN-2			
NNI-貝	未	○	○	m	(○)	(○)				NN-3	NN-貝								NN-2			
NNV-貝	未	○	m	m	m					NN-3	NN-貝								NN-2			
NN-不	未	m	m	m	m					NN-3	NN-貝								NN-2			
NN-不	(○)	m	m	m						NN-3	NN-貝								NN-2			
NNI-貝	未	(m)	(m)	(m)						NN-3	NN-貝								NN-2			
NNV-貝	(○)	(○)	(○)	(○)	?					NN-1?	NN-貝								NN-2			

シカ上顎骨	R	m	m	m	c	i	i	L	i	i	i	c	m	m	m							
層位	M'	M'	M'	P'	P'	P'	C	I	I	段階	層位	I	I	I	C	P'	P'	P'	M'	M'	M'	段階
NN-貝	(○)	○	○							NN-4	NN-貝		(○)	○	○	○	○	○	NN-4			
NN-不		m	m	m						II-2	NN-貝		○	○	○	○	○	○	NN-1			
NN-不	○	○	○							NN-1	NN-貝		○	○	○	○	○	○	NN-1			

キツネ 上腕骨 L 1 点。

イヌ 下顎骨 R 1 点(NII-II)、上腕骨 L 2 点(NII-II・NIII-II)、大腿骨 L 1 点(NII-II)、尺骨 L 1 点(NII-II)、脛骨 R 1 点(NII-II)。

カワウソ 尺骨 R 1 点(NII-II)。

ホモ(ヒト) 頭骨、大腿骨 L、上腕骨 L、尺骨 L、橈骨 R、寛骨、指骨が散乱状に出土している。また、幼児骨の出土もある。

鹿角 頭骨付き 10 点、落角は 12 点である。鹿角の出土は、叉状のもの 16 点、割った状態のもの 48 点、折った状態のもの 5 点である。鹿角は鉛・釣針等道具の素材として貴重な存在であった。

③ 魚類

スズキ 上顎骨 R 1 点、L 1 点、歯骨 R 20 点、L 14 点、計測値高さ(H)が、0.7 cm ~ 1.29 cm であり、現生標本の歯骨との照合の結果、体長 40 ~ 70 cm の大形スズキであることが明らかである。鰓蓋骨 R 23 点、L 31 点である。破損品が多く、計測出来る資料が少ないが、長さ(L) 5 ~ 6 cm であり、最長 8 cm である。刺突痕、押圧痕、カミ痕の付いた資料も存在し、刺突漁が考えさせられる。椎骨 2 点。

マダイ 上顎骨 R 12 点、L 7 点、L は破損多く、顎(W) の計測値では 3.4 ~ 6.2 cm の資料 15 点から、体長復元すると 50 cm 以上大形のマダイである。下顎骨 R 9 点、L 5 点である。同じく顎(W) の計測値は 3.6 ~ 5.5 cm の範囲内で、体長復元は 40 ~ 50 cm 以上の大物である。

クロダイ 上顎骨 R 9 点、L 7 点、下顎骨 R 9 点、L 8 点であり、顎(W) 計測値が 2.9 ~ 4.8 cm の範囲で 40 cm 以上の大物である。

タイ類 前頭骨 7 点、椎骨 8 点。タイ類はマダイかクロダイの区別のつかないものである。

マグロ 椎骨 22 点、長さ(L)・幅(W) の計測値が 2 ~ 3 cm のものが半分で、3 ~ 5 cm のものに集約される。4 ~ 5 cm のものは体長 2 m のやや大形のものと考えられる。

目	1~2	2~3	3~4	4~5	計
脊椎骨	2	11	3	6	22

カツオ 椎骨 1 点。

コモンフグ 上顎骨 R 3 点、L 1 点。

アカエイ 尾刺 2 点、刺突具として再利用したものである。

④ 鳥類

カモ類 上腕骨 R 36 点、L 28、橈骨 R 9 点、L 8 点、尺骨 R 30 点、L 7 点、中手骨 R 6 点、L 9 点、大腿骨 L 5 点、脛骨 R 14 点、L 8 点、中足骨 R 3 点、L 3 点、鳥口骨 R 8 点、L 5 点が検出されている。鳥類の中心はカモである。

アビ 上腕骨 R 1 点。

ウミウ 上クチバシ 1 点、上腕骨 R 1 点、鳥口骨 R 1 点、大腿骨 R 1 点。

ヒメウ 上腕骨 R 2 点、

ヒシクイ 中手骨 R 1 点、鎖骨 R 1 点。

マガノ 中手骨 L 1 点。

⑤ 貝類

貝類は特別にサンプル採集したものではなく、眼に付く遺物を採集したものである。したがって、製品としての貝輪や装身具とした垂飾品が目立つ。貝層も純貝層でなく、混土が多い貝層である。砂泥性の二枚貝と岩礁性の巻貝が主体である。

[V] 出土遺物の考察

(1) 土器の編年について

I～IVグリットの土器採集で、1貝層が混土層や混貝層のため、しかも、N I区で1貝と2貝層が分離出来なかつたことと、西壁面からの1貝層が途切れることもあって、1貝層の遺物を無視したことに始まる。したがって、1貝層の遺物採集はIII・IV区になって小量の遺物が採集されている。主体は2貝層の遺物である。貝上も2貝も土層も2貝層を握り切ってなく、遺物が混在する。遺物の出土状況を詳しくみると、

貝上 【I区】土面に沈線が巡る小形鉢形(太幅C型)、器表面精巧な研磨、口縁近くに1条の沈線、单独突起、裏面に口縁近くに段落(太幅B型)、沈線間に刺突刻目文(印加B型)、繩文沈線間に小瘤突起施文(印加A型)、沈線入組文S字状文(印加A型)、口縁部無文、口縁部下に隆起線に連続刺突文(林10形)の土器。土層になって、繩文前期の織維土器。

【II区】製塩土器(太幅B型)、口縁部研磨、2本沈線上に入組文、器表面突起に十字の沈線(太幅B型)、2貝層竜刻目文、沈線間に刺突刻目文(印加B型)、沈線間に小瘤突起(印加A型)、入組文(印加)の土器が出土。土層で織維土器

【III区】貝層上は主に器表面研磨した楕形土器に口縁沈線入組文・同じく、肥厚した突起に十字の沈線文土器、鉢・深鉢形で、口縁部無文に沈線入組文・口縁繩文帯下の無文帯に入組文の土器(太幅B型)が出土。2貝層は竜刻目と入組文に小瘤突起(印加A型)の土器。沈線間に小瘤突起の土器(印加A型)の出土がある。土層は前期の織維土器である。

【IV区】口縁に数条の沈線文、底部に近い資料で入組文施文(焼C型)の土器。2貝層は肥厚した突起を持ち、繩文・無文・繩文と交互に文様帯があるが、下部に入組文となる土器(焼B)、竜刻目と刺突刻目文のもの、沈線間に刺突刻目の土器群(印加B型)、口縁にやや大きい突起を持ち、器表面無文の鉢形土器(印加A型)がある。土層は各区と同じ前期土器である。

貝上 I～II区に出土遺物がやや多くて、III～IV区は少なく10点そこそこのある。時期も晩期大洞C・B式と後期末葉の宮戸III a・bが混在している。しかし、III～IV区に初めて、第1貝層に土器が少ないが存在する。晩期土器の出土がない。

こうした状態から貝上は晩期(焼C・B)と考えてよさそうである。少なくとも本貝塚の主体の層は第2貝層である。

1貝 【III区】竜刻目の土器、入組文土器、沈線間に刺突刻目文施文土器(焼魅B)が4点の出土がある。

【IV区】沈線間に刺突刻目文下に入組文施文の土器・入組文の土器(焼B)の4点の出土がある。

こうした状態から貝上は晩期(焼C・B)と考えてよさそうである。少なくとも本貝塚の主体の層は第2貝層である。

2貝 2貝層を整理すると、【I区】2個の小突起を持ち、口縁の沈線間に刺突文の土器群・製塩土器(太幅B型)。口縁部無文で三叉状の沈線文・魚眼状文の土器(太幅B型)。

竪刻目文(後黒彫)。沈線間に刺突刻目文と入組文施文・肥厚する突起と口縁にやや大形突起を持つ土器群(部Ⅲbや部Ⅳ)。山形突起を持ち、沈線間に瘤状小突起・縄文入組文中に小瘤突起・壺形土器の口径部の入組部に2個の突起を配した土器・器表面無文で単独の大突起を配した土器(部Ⅲb)の出土がある。また、数が少ないが宮戸II a式併行、中期大木10式の土器も出土している。粗製土器の羽状縄文(後黒彫)・斜行縄文の土器群・器表面無文・研磨した土器の出土がある。織維土器の出土があるが下層土器である。

【II区】2分した突起を持ち、器表無文の口径部に沈線を配したもの、小山形口縁下に三叉文の施文(後黒彫)・入組文の交差部に三叉文を配したもの(後黒彫、部Ⅲ)、突起を持ち沈線間・入組文に竪刻目施文・小瘤突起の土器群(後黒彫)、凹部突起・小突起を持ち沈線間・入組文に刺突刻目施文の土器群・体部に単独の大形突起を配したもの(部Ⅲb)、入組文・交差部に魚眼状文・小瘤突起施文の土器群(後黒彫・後黒彫)。2分した大山形口縁で、沈線間・縄文入組文中に小瘤突起を施文した土器群(部Ⅲa)が特に多い。やや古手の土器西の浜式の土器が少量、宮戸II a式の土器も少量出土している。粗製土器の羽状縄文(後黒彫)・斜行縄文・器表面無文研磨土器も多い。

【III区】晩期大洞C式、大洞B式、後期末葉の竪刻目・入組文、宮戸III b式、宮戸III a式、宮戸II a式、西の浜式、中期大木10式が出土しているが、後期末の宮戸III式が主体である。粗製土器も刷毛目文・羽状縄文(後黒彫)・斜行縄文施文の土器、無文土器が多い。

【IV区】III区と同じ様相であり、主体は宮戸III式である。

2貝層は現在の型式編年で見ると、幾つかの時期の違う土器が存在するが、残念なことに壁面に表現されている層位では区分出来ないのである。昭和34年のR区、その後調査した昭和35年のS区、昭和41年の新産都市指定の調査、同年の宮城教育大学の調査の成果によって補完されるようである。

土層

【I区】上層の遺物が一番多く混入している。中心は口唇部土面に刺突によって鋸歯状のもの、口縁端に刻目の施文で、羽状縄文、斜行縄文、ループ文、撚糸文、組紐文が施文された織維土器で、裏面は擦痕や整形痕程度であり縄文前期初頭のものである。

【土層下】も織維土器だけ様相は同様である。

【II区】混入があるが、織維土器で羽状縄文結束のあるものがある。

【III区】II区と同様、織維土器である。

【IV区】III区と同様、織維土器でループ文、組紐文の施文がある。

以上の様に再吟味すると、貝上は晩期大洞C・B式期中心の層と考えられる。1貝は出土資料が少なく明らかでないが、少なくとも晩期の遺物はなく、竪刻目文・入組文の施文の土器の出土であり、1貝下の混土層を含めて後期最末期の時期と考えてもよいと思う。

2貝のIII~IV区は堆積が複雑で、2貝層の上部に堆積した混貝層と混土層で区分が出来たと思われるが、現時点では明らかに出来ない。2貝は宮戸III b式から宮戸III a式の層と考えられる。昭和41年の新産都市指定の調査やN区の上段S区やN区と重複した宮教大の調査よって、推測されるが昭和41年調査でAトレンチ第1貝層周辺は後期前葉の時期、第2貝層周辺は中期大木10式の最末期の段階の時期、Bトレンチで後期前葉から宮戸II式周辺の時期が明らかにされている。宮教大調査では晩期初頭と後期末葉の宮戸III式の時期、Sトレンチでも晩期大洞C式、製塙土器が多く、Nトレンチと同じような様相があり、特に、西の浜式の資料が多く、西の浜式の新型式設定のきっかけになった。過去の調査に

よって明らかである。

土層は纖維土器の前期初頭の時期で、昭和41年調査では第3貝層の主体土器群であることが明かである。

N区の整理によって、今まで後期宮戸III b式に包含していた、肥厚した突起を持ち入組文系土器群とそれに範刻目を充填する手法の遺物が確認された。残念ながら層位的には区分出来ないが、型式的に分離できる。かつて、小井川和夫氏が富崎貝塚の報告で、搅乱の激しい遺物であるが、文様の特徴で区分した労作で、7類→6類(c)とした遺物に『範刻目』の技法が存在(2003 付註)、また、平成9年(1997)に仙台湾周辺の貝塚群の調査研究として、台開風越地区の調査が実施され報告されている。これを基に、小井川和夫氏より出土土器の検討が実施された。層位的に古い順にI～VI群に分類し、特に、II～IV群が後期後葉の土器群が層位的に確かめられ、瘤状小突起土器群→“刺突刻目”土器群→入組文文様系土器群となる。しかも、IV群に『範刻目』施文の存在が示された(2004 付註・1986 付註)。

古くは、昭和22年の宮城師範学校地歴科專攻有志の考古学同好会が、山内清男氏の指導で調査した、名取市金剛寺貝塚の遺物を整理する機会があり、この時に、未熟であるが、後期の宮戸編年の検討で、新しく大洞B式直前形式として、「宮戸IV式」の分離の可能性を示した(1960 付註)。その後、考古学雑誌の発表の段階で、第5類土器は「入組文が盛行する。(繩)瘤状小突起帶は口辺部では縄文帯になり、頸部では稜帶が沈線点刻となり、縄文帯と変化し、山形の大突起ではなく小突起におきかえられ、この小突起も2つ乃至3つにわけられ、口縁部が肥厚するし、磨消縄文の外に刻目状の細い範状のもので刺突し、縄文に擬したもののが好んで使用されるようである。また、入組の部分に三叉文の祖形らしいものが表現される」と説明し、長い引用であるが大洞B式との大きな違いと、安行III a式との関連で後期・晩期の狭間での悩み混乱がって、無難な線として「宮戸IV式」を宮戸III b式に含めることになったのである(1962 付註)。苦しい胸の内を示している。これに関連して、大洞B式の2分説もある。山内博士の先史考古学論文集・新第4冊の文様帶系統論の挿図6-8の下部にB2・B C 2の記載があり(1972 付註)、晩期初頭の分離が進められる。その内容は確認出来なかった。

小井川氏の2・3の報告論文に「宮戸IV式」を宮戸III a式に含めた記載あるが、報告の読み違いで、宮戸III b式に含めたとここに訂正する。

宮戸型式の再検討のために西の浜貝塚の調査が実施され、宮戸型式の後期後葉の宮戸III a・III b式の最確認されたこと、更に、宮戸II式から瘤状小突起施文の土器群「西の浜式」への発展がより確実になったことと、宮戸III b式に含めたかつての入組文文様系土器群「宮戸IV式」が改めて、「風越IV群」の成立によって分離されよう。しかも、Nトレンチの遺物に、晩期大洞B式の前段階の入組文結節部に三叉文の施文された土器群の出土もあって、宮戸台開・七ヶ浜二田・沢上貝塚の遺物を再検討する必要がでたことである。

縄文前期の土器は、昭和41・42年(1966-67)の新産都市による調査が、貝塚の北東部が全面調査となり、昭和41年分の報告が完成して刊行された。それに拠ると、前期初頭上川名II式(室浜式)相当する(2008 付註)。しかし、本貝塚の土器群は、上川名II式と違い竹管文、撲糸文、撲糸竹管文等の口縁部文様帯が全く含まない。かつて、東北大に桂島貝塚の出土土器が収蔵されており、竹管文・撲糸文・撲糸竹管文等。口縁部文様帯が全く含まないことから、上川名II式から大木1式への発展を理解することから、上川名II式から分離して「桂島式」が提唱された(1960 付註)。その後桂島貝塚の調査があり、口縁部文様帯を持つ土器群が皆無に等しいか、県内前期初等の松島町貝殻貝塚(2008 松島町教委)、七ヶ浜町左道貝

塚(2005 編著)、南境貝塚妙見地区(2006 編著)、南境貝塚久保地区(2006 編著)の縄文前期上川名II式に併行する土器群は、口縁部文様帶を持つ遺物が少なく、羽状縄文・斜行縄文施文の土器群の割合が多く、竹管文・撫糸文・組紐文が少なく施文土器群が極端に少ないことは事実である。林氏のように型式の差か、地域差が不明である。

再度吟味が必要である。

(2) 骨角製品について

第34図と『松島町史』資料編Iの122~123頁に写真掲載している。刺突具類が多い。鎌状の形態が多く、特に、アカエイの尾刺を利用したものがある。アスファルト付着のものがあり、軸部を矢柄に固定したものである。釣針は2点と少ないが、特に、特殊な軸鈎の形態になると推測され釣針の出土がある。このように骨角器にも不定形での自然面をもったものが相当存在する。

(3) 石製品について

石器については、定形的で用途の確定される礫石器・剥片石器はわかるが、現実は、不定形で使用目的の明瞭でない石製品が多い。打痕、擦痕、磨痕のみで、小形の不定形の器物、また、大形の丸石も多いものである。これからは、これらのものを明らかにしなければならない。石器は多くない。石斧、凹石、扁平な楕円形の石器、周囲調整された石器、丸石、擦痕のある棒状石器、擦痕灰岩礫等、棒状石器のみである。

(4) 自然遺物について

この時代の調査は自然遺物を特に意識した調査ではなかった。眼に付いた遺物を採集する方法であり、土器中心の調査である。貝類20種、哺乳類8種、魚類10種、鳥類6種、爬虫類1種の合計45種類の検出は立派なものである。それも、動物骨格の部位骨の特徴によって、種の同定が出来るようになってからのことである。早稲田大学の金子浩昌氏の指導の御蔭である。

貝類20種の内、二枚貝類が過半を越えるが、西の浜貝塚の周辺環境が遠浅の砂泥性であることを示している。

哺乳類は縄文時代の中形獣のシカ・イノシシ獣を中心である。最近動物遺体の分析によって、狩猟期を推定する新しい見解や方法が提起されている(1974 講談社・1980 様記)。上・下顎骨の歯萌出の段階によって狩猟期を考えると、11月から翌年5月頃と推定され、初秋から早春に当たり、冬期を中心の狩猟であることが明らかである。

また、マダイ・クロダイ・スズキ獣が盛んであり、釣糸・刺突糸であろう。しかも、上・下顎骨の計測値を原生標本と比較によって、体長を推定する方法がとられ、タイ類は50cmの大物、スズキにとっては50cm以上の大物が捕らえられている。

内湾奥に位置する西の浜貝塚でもマグロが出土している。松島湾内に進入したものか、外海での漁撈活動が明らかでないが、マグロ漁も活発である。

本貝塚では骨角製漁具の出土は少ないが、仙台湾沿岸貝塚地域は漁撈具の開発が旺盛な地域であり、特に、古式離頭鉈の出現があり、改良に改良されて、燕尾形離頭鉈となる。釣針も大形で頑丈で釣付きの出現があり、大形魚種のマグロ・カツオ漁等の延縄漁に使用されたと考えられる、釣針が発見されている(樋野2008)。

[VI] 終わりに

層位的調査としては問題があるが、宮戸型式の検討では成果があったと考えられる。特に、

後期後葉の宮戸III式は、瘤状小突起施文土器群（宮戸III a式）から刺突刻目施文土器群（宮戸III b式）へ序列が正しいことが確認された。新しく宮戸III a式への前形式の西の浜式の存在をも確実にした。また、金剛寺貝塚の報告時に大洞B式直前型式として宮戸IV式の存在を示したが、1962年の考古学雑誌報告では、宮戸IV式を宮戸III b式に含めると訂正したが、2004年台開風越地区の検討によって、風越IV群が分離され、入組文様土器群・範刻目施文土器群が、宮戸III b式以後に継続する土器型式になり、晚期大洞B式と繋がるようである。N区では層位的に区分が出来ないが、町史の土器の概要の説明での「第6類土器」と分類したものにあたる。註1として「第6類土器として分類した一群については、後葉の複雑な要素と共に、研究者の主点のとらえ方によって意見の大きく分かれるところである。(図)第5類土器(伊弉諾)と共に改めて位置付けを考えなければならない」と説明している。R・S区では断片的であるが、N区は相当量の入組文様土器群・範刻目施文土器群の出土があり注目していた。

漁撈具の骨角器の出土は少ない。管理が悪かったかも知れない。刺突具が多く、釣具が僅かに断片2点に過ぎない。しかし、自然遺物から見ると、当時の調査として魚類は大型の獲物を捕獲しており、マグロ漁にいたっては高度技術が駆使されたと考えられる。

狩猟用具の石鏃等の薄片石器は皆無であるが、鳥類はカモ中心に大型のヒンクイの捕獲があり、哺乳類はシカ・イノシシ中心に冬期に狩猟が盛んに実施されたことを物語っている。

西の浜貝塚の古い調査物、昭和34・35年のABC区・R区・N区・S区の調査で、西の浜貝塚出土は明らかであるが、地点不明な骨角製造物があり、資料として第34図下段に提示した。

以上で西の浜貝塚の整理報告を完了することになる。松島町史編纂にかかわって以来、人と時に恵まれ、西の浜貝塚の整理場所の設定、退職された当時の文化財担当の菅原進・丹野公輝の各氏等と、町教育委員会の皆様の協力とがあったからである。西の浜貝塚の調査は昭和33年からの調査、50年にならんとする古い遺物の整理が完了、以後、町によって遺物が管理されるよう願いたい。

参考文献

- 1939 松本七郎「松島町なる尚ほ若干の考古遺跡2・3・4」「仙台郷土研究」9-8・9・10
1951 加藤季「宮城県上川名貝塚の研究—東北地方彌文文化の編年学的研究(1)ー」「宮城学院女子大学研究論文集」
1956 後藤勝彦「宮城県宮島里浜田貝塚の研究」「宮城県の地理と歴史」第1集
1957 関 一「陸前宮島里浜田貝塚の土器編年について」「宮城県教育委員会」「教育論文」第2集
1960 関 一「宮城県各都市高麗寺貝塚出土過文土器の研究—陸前地方後葉彌文文化の編年学的研究ー」「宮城県の地理と歴史」第2集
関 一、斎藤良治「陸前宮島里浜田貝塚の研究—昭和30年度Cトレッサー」「宮城県の地理と歴史」第2集
関 一、林 譲「宮城県桂島貝塚出土の前葉過文土器群」「考古学雑誌」47巻4号
1962 後藤勝彦「陸前宮島里浜田貝塚出土土器について—陸前地方後葉彌文文化の編年学的研究ー」「考古学雑誌」48巻1号
1967 宮城大日本史研究会考古学部、一ト「宮城県む町西ノ貝塚の研究」「歴友」2号
1968 斎藤良治「陸前地方彌文文化後半の土器編年について—一宮戸貝塚および他の貝塚出土の土器を中心として」「仙台満洲の考古学的研究」
1970 奈良社会部「宮城県七ヶ浜町田井田二月田貝塚調査報告」「貝塚」6
1971 関 一「宮城県七ヶ浜町田井田二月田貝塚第二次調査調査報告」「貝塚」7
関 一、後藤・丹治・根「宮城県七ヶ浜町民田貝塚の調査」「仙台湾」創刊号
1972 山内清男「彌文式土器・続編—V文縫合系統論一」「山内清男・先史考古学論文集」新第4集 先史考古学会
1974 渡辺五郎「狩獵活動の季節性について—シカ・イノシシの遺存骨による裏面の推定ー」「宮城史学」3

- 1975 同 「青島貝塚出土の動物遺存体について」『南方町史』下(資料編)
- 1980 大庭司記之「遺跡出土ニホンゾウカの下顎骨により性別・年令・死亡季節査定法」『考古学と自然科学』13
- 同 小井川和夫「宮島台置貝塚出土の遺文後罫末・鹿島初頭の土器」『宮城史学』7
- 1986 宮教委 「田柄貝塚I-1遺構・土器」『宮城県文化財調査報告書』第111集
- 1988 高柳圭一「仙台溝南辺の繩文後期後葉から鹿島初頭にかけての編年動向」『古代』85
- 1989 む島町 「松島町支 資料編I-松島町の主要遺跡、2番の浜貝塚」 松島町史編纂委員会
- 1993 関野達人「西ノ浜式とその周辺」『歴史』第81輯
- 1997 東北歴史資料館「里浜貝塚X-1宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚風越地点の調査-」『東北歴史資料館資料集』43
- 2002 関野達人「浜上貝塚出土晚期繩文土器の再検討」『宮城考古学』4号
- 2003 後藤勝彦・小井川和夫「富崎貝塚-北上川流域の後水産貝塚の研究-」『石越町文化財調査報告書』第1集
- 2004 小井川和夫「里浜貝塚風越地点出土土器の複数」『東北歴史資料館研究記要』5
- 同 船橋勝也「南鏡貝塚調査の層別の成果-1-7トレンチの場合」『宮城考古学』6
- 2005 同 「宮城県宮城七ヶ浜町在道貝塚の調査-陸前地方前期繩文土器の編年学的研究1-」『宮城考古学』7
- 同 同 「南境貝塚調査の層別の成果II-8トレンチの場合」『宮城考古学』24
- 2006 同 「南境貝塚妙見地区の調査-陸前地方溝平隙末前幕初頭の編年学的研究-」『宮城考古学』8
- 同 同 「宮城県河北町南境貝塚久保地出上の貝類末前幕初頭の上部-陸前地方早期末前幕初頭の編年学的研究2-」『秋田考古学』50号
- 同 同 「宮城県塩釜市桂島貝塚出土の前期繩文土器-陸前地方前期繩文土器の編年学的研究3-」『宮城史学』25
- 2007 同 「宮城県石巻市南境貝塚出土の骨角・牙・貝製品について〔I〕-琵琶-」『宮城考古学』9号
- 同 同 「宮城県石巻市南境貝塚出土の骨角・牙・貝製品について〔II〕-刺突貝繩-」『宮城史学』26
- 2008 同 「西の浜貝塚」『松島町文化財調査報告書』第1集 松島町教育委員会
- 同 同 「貝類貝塚」『松島町文化財調査報告書』第2集 松島町教育委員会
- 同 同 「西の浜貝塚 R・Sトレンチ(昭和34・35年)」『松島町文化財調査報告書』第3集 松島町教育委員会
- 同 同 「宮城県石巻市南境貝塚出土の骨角・牙・貝製品について〔II〕-鉤針-」『中嶋彰告先生追悼論文集巖王東蘿の郷土史』
- 同 同 「宮城県石巻市南境貝塚出土の骨角・牙・貝製品について〔II〕-垂飾品-」『秋田考古学』52号

図版作成に山田ケイ・新野のり子・兼平宏子の各氏に全面的に協力を受けた。改めて感謝いたします。



昭和34年調査地点 A・N区（東から）



貝塚先端部（東から）



N区遠景（東から）



N区遠景（南から）



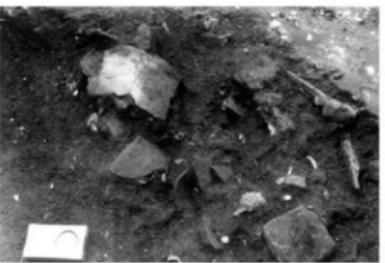
Nトレーニチ（北東より）



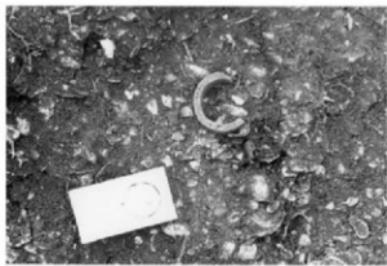
遺物の出土状態



シカ下顎骨など遺物出土状態



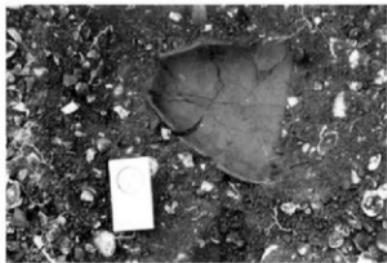
遺物の出土状況



耳飾の出土状況
(三叉文施文のもの)



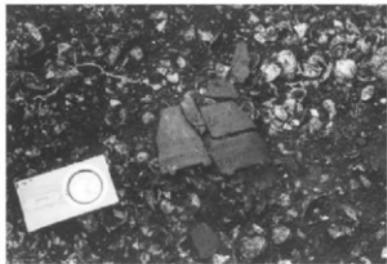
N IV区貝層完形土器の出土
(52貝の左下写真の土器)



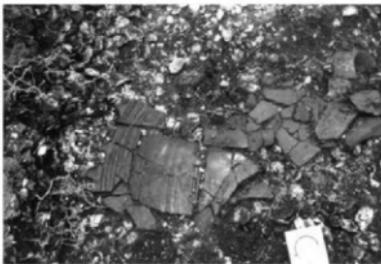
完形土器の出土



完形土器の出土



刺突刻目文の土器出土 (II区2貝層)
(図2の7の土器)



刺突刻目、入組文土器の出土



刺突刻目、入組文土器



高台付土器の出土 (II区2貝層)
(図2の8の土器)



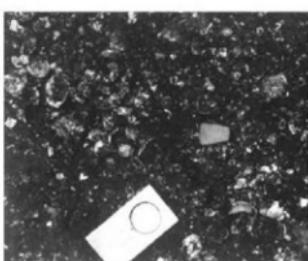
N II貝下の注口土器



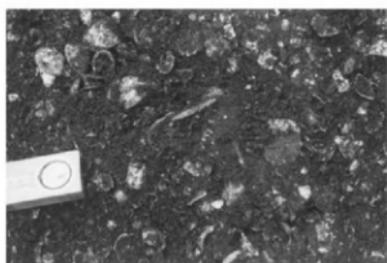
遺物の出土状態



N III区石斧



小形石斧の出土



固定鉤の出土



報告書抄録

ふりがな	にしこはまからいづか えぬとれんちのちょうさ (じょうわ34ねん)
書名	西の浜貝塚 Nトレンチの調査(昭和34年)
副書名	
シリーズ名	松島町文化財調査報告書
シリーズ番号	第4集
編著者名	後藤 勝彦
編集機関	宮城県宮城郡松島町教育委員会
所在地	〒981-0215 宮城県宮城郡松島町高城字町10番地
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
国史跡 西の浜貝塚	みやぎけん 宮城県 みやぎぐん 宮城郡 まつしままち 松島町 いそざき 磯崎字 にしこはま 西の浜	17	2	38度22分52秒	141度4分56秒	1959.7.29～ 1959.8.3	2×8m	縄年学的研究

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西の浜貝塚	貝塚 製塙	縄文前～晩	特になし	縄文土器、土製品、骨角製品、貝牙製品、自然遺物	Nトレンチ
要約	西の浜貝塚の昭和34年に調査されたNトレンチの調査報告書である。縄文土器、土製品、石製品、骨角製品、貝牙製品、自然遺物等が出土している。				